俳諧今七部集　上

837-2 (済)

俳諧資料カード	
年代	天保8年
編者(筆者)	庚年ら
書名	俳諧今七部集 上
備考	

(下垣内蔵)

利根左官 丁知撰 一 二 三 沙鴎抜
いふり庵 茶乱抜粟 鴟小圃撰
松隣夕秋一楼撰 東了翁 悠々撰
落水 庚年撰

俳諧 今七部集

東都書肆 万笈堂梓

呉市阿賀北五丁目三十三番八号
下垣内和人
電話〇八二三ー七ー一九五四番
〒737

今七部序

重能が親雛あり親雛親雛となると
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 箱 [illegible] 出 [illegible]
[illegible] 好 [illegible] 圃乃大

下垣内氏

小技芸に至る迄何ぞ家々に其流
様何事も古より志ある繁栄ならざる
いふもんハ唯識唯心有かなる事例
派の宗之もまたかくの如きしかり
なる流儀の法則あるを従ひ出る
後法然の宗旨へ所に出る所謂
の法あるを以て紀と法ども紀に
法もて秘学の繁栄なれり　元古

今の宗觀有て諸て学先法是ハ
思業ある者とかくのごとき其準縄と
する繁栄ならぬ書の古部元禄より此の如
何ありて今有と繁栄ある繁栄に古きを
例於流布も子奥年くすくしく
妙法是七巻のりし如きたる集め
接へ紀有ありてき一部之先頭し
妙録とかくるに子み為元如の心清き

あら数多連ゆる道へまゝたる
ものなかなかも安まりの用心なりの
賢輔の楚漢のちえなるべし

天保八年九月

半舎書

序

時を得るといふは中人のよく知る所なれどもなかなか
世の中にはいかにいふとも天の時を得ざる所なれば
すべて人は時を待つべくして行ひ難き
はこのりんの随ふ文学を知る人ぞ知る
家を立て家の鑑年月を編むる
の多くある事ありて法度を守る事を
以ひけるなれば得たるもの少なきなり
あるまじき一部のことを得るもの
大家の変化の中にあるまじき人の
虚をなして何事も其のなかの
道にかなふものは人の事を得てかくなる

是なりとなん俳優の諸芸をかくいはるゝ文運乃
有かりける化の世となりて青の家にはる猶も盛り
をはじめ教へもさるを博くしてこの術まるで先只なる
以てあるよりはやてゝ名のみ犯の沙汰なくひとすあらび人
先に古書あつめて作者の詩まに言ひし趣をうはへ先の作
なを物の変化にいはるゝ詩のさにまほふむとの方
にも著者より来るむの数年のさまの工をもて言ふ
詠のり一字をさし加へ今七郎集と名て梓にし
詩せ所をも詩をなす気しる

天保八丁酉冬十一月　金鵞庵

廣年

宜包

利根太郎

近き年下総の国葛飾江戸の里に庵結びて住
ひ古き家を求めて描きひとらでに住し事ひとりし
より陽里にもの人と形勢しちなき折も其の事の
鉢の絵をする人とはしめりけるに千ちの歴をも
亀山の勤め有の折にて雲居の据にて千の草も
に我見する代りて始めて甚むしをつけて文の風を表し
乃世の子ハ其の事より比来乃様の形にも分つ
揚しの漢延の集ひよりて甚而して事に到へ
揖斐の祖名の去りしは延て名押砂の丁寧に詩
を記して真偽の慥なる探部をも得らて所々にも
策に書せるを其のを此紀年に江戸にとて後の文に其の詞にも

加へ奈たえさるハいふもさらなれと此年まて書もて捨かたくあつむる程に中に
ひとつの集なりし狂歌あまりなりけるを猶すてゝ思ひあくぬまゝに
面白くてわさ〳〵たくみに為したる大仏をも我も此之れは官位の法は
達えて深く我をひすける形状見の板名号をうつしすゝめの為に不の
ならん埋めて真なく一封それを高き事人の好むところ唯て善さへ
たゝしもれ求めるにしるそのもとにあるをあさましき事ちやするやさしく一織を
利根川日記と志るもまたなを本年にして此の道も出来るは丁亥の
頃猶以て便利ふして任宝秘録日くわりかを禁とかくしまはれは続編を
えて利根右日記と號して甚かなる世ふ太郎二郎かに作らんとて其の紀
すさひなるをかくいふすめ且ハ是までおとなしよみて初ゝし
わかさねるよろこひを以てなりけり終に出来るふ事なりありける

大年為八朶

視聴許理を極むといふものはむかしより然たり称して都よりいふ
更禮の道ハ更りたる家のつとめの事ありてそれはこゝに記せし大略は
さ出たる者をよするのはなりおもて金て志もつかさなる我里利根川の
ほとりに日数をおくりあるゆゑに江戸のたよりに数をへいのこゝろもも
其のりて芳舎故郷をさきをなる人はのなさるるもなんとて嬉しけれは
あはてゝハ花をたつね相対のへりのまにまにあそびしものならず身も是もしか
るに友人福室のあるしも此にて郡よりて来りて小文のある
筆のあるよしてなにかしん我をとに部対してめ為なきるれたを記
其のうちを言とはさましまするにとあるをのそ鑑みて栗柿蕎主
人は江戸なる故実ありけりとまりけるに七文字かりの事なりし旅だちしかく
物をもとむるにて此のなさる事を梅の里より此にて志かりしくに其の
落思ひもいるとる野かと即しくもやかてたさ枝ひ家きを折る

哭ゆるほとりに秋立旅つきたる恵たまの對つきたる秋の闌
あらはに声を紛れするやうに秋しらさ感させやうて一蹊とられびあり給
こゑ鄧高信気庵に私さの罌されいふるさ花は有し是は花く
の跡乗の名々七勝もの記し名をいふるあつめれかしらるのする
さなさいるりあるにたりける

明ぬれハ露にぬれたるちるさくら　小園
梢むつれする墻の障子行　下知
鶺鴒は帰り鶺鴒の鶺鴒帰り　桐雨
日の本にて日の矢とり待つける　禾木
せりもさも袖に雲て届る月の船　小蓑
こ所の所から秋のせ乃ふく　冑英
糸撫の賞すて有て出かる有り　江白

秋ほし守ては中る我ありけり　宕郷
うちに漂の来めいてちる有く垣消を
秋あり秋の月　知
　　鶏の操りの
障子や雁の明けくの書操ひ　桐西
山鵲や秋ありもき西　禾木
秋ちらくかすも来るもの浦の宿　竜郷
ゆく春や何ら人をしてるまかち　小園
咲かすかれて鵲ちたし大根武　江月
菜種や秋をのかなる鵲のもとく　柳蓑
秋乃みや掛り吹るに咲てけり　花是女
鳴鵲の宮の皆なさく雲のうれ　小蓑

乙鳥も皆鳴きれを拾ひけり　得燕
千歳の中ゟ十九ある日なかりけり　丁知

拾風斎真似

大仏茶振し茶臼ゆりむや花菫　蔵六
たまこも出し也た地乃噂たつ　幻之
夜森ゟ桜の振りをかぶせて　茂桂
酒宴む芸乃襟をあつら繁る　丈羲
ちいくと月の出舟於出るあり　里妹
一たて来てれ居の間をおく　丁知
我ゟ止出るきたんちを送　亀山
竹なすかし見る稽の木かし　嵐峯

同勝時

青のすゞきの香しや星の面　茂桂
森きる色てすへる岩のありまか　丁知
市出しの天も揺れかけ降りちりて　亀山
佛の助し砂より遊び来り丁出
ひりかる家乃の小そあわれ何り
たもり江のなあき

勝江蒼きまて　森々

今雑してかゝ細こや雨格笠
萩乃出くち乃椿ちらちらし　丁知
日なあそる鞠乃あゝ来ゆたつけて　来
醇買ふちそ月新出しのふ　出

蒔絵のちん喜ゝわりなく置　森
庵知らく是乃飛やつく　知
あらん温気元達の蔵しよ立知ら違　森
薫るらしゆりくり出す　紫沙　台

挨拶

急ぬ月安みては　横まらに花兄我　森ゝ
うらぶ鶏乃に誘すかゝる也春の暮　丁知
若さ四も若葉のふる事日の比ゝす　森
月影らあき出てすむ新る葉の　ゝ
まつらりの井蓋出かる清水のるの　知
宮ゝ飛麻也ちらつるえて老まる時　ゝ
出所ゝ香の夜ある人節まらゝるゝと

葉うたりし秋の豆翌年帰路の
首途まにゆへすまりよくも読ひ
よくそ富士を眞して陸江戸へ
新ゞ歌の豆格も恐れゆかゝらて　丁知
门さ紙い濁まく来るけるゝ囚ゝ底
葉らしも乃ろう秋らくす蒿妻ゝ　得蕪
一都す縁の路寝をはけあしして　知
ものらみゝもす国の大畠きる　蕪
牛はくのり栽たく成し月の條　知
秋ゝ花萩乃上野く在つゝ妹　蕪
小やゝえの家らも知けすく窓にえす　知
子乃楚く入さとするる厥かき　蕪

こゝ鐵乃きらへにつけてはのくれて　知

星ちらちり来なん冬野あらしかな　蕪

松条乃褪丘有礼にほそぎかり　知

とゝ待りにあ秋楼の出来る　蕪

ふくり口出りあきちかひよりつんで　知

まかりし来て蝶をあつる　蕪

陰居し紀も古屋のゆる替しえさ　知

あんのりかすむ山乃人にみ　蕪

月花有寶す止んた暗きく　知

胡麻かけさしうあくるまゆ合く　蕪

ささらひ出る年一艘にゐるみ

家猪にみの茶店にてえて犬ある猪　得董

虻あくり待りけ次手の土筆哉　、

菓城とるや西くしく出る網　丁知

春のはや田の砂のけし道の中　、

綿子啼て羽音もちらち川辺哉　巴東

只糸を持しくふくやちくるの陰　花晨女

あちこちの噂ひぐらしき折庭の子　陶々

何くる形の光ふるゆる也草の山　知

朝し角人ふるき山ててなりゝ　蕪

菊の上よりかんであるきぬ木丘董　少年 野ん

思し待ちちりむつひぬ粉の実　白起

爺らの家のあらし亀ら来て芥葉られ　知

ゆうはらやあさりのひらさ丘の寺　清庄

やぶ入の事を待ぬもなし田うゑ芽　蕪
たゞ飛ひに寄きて鳴や杜の蝉　知
岡の家や隠ふとも見へ丹の秋　、、
てらさんで紫らん花さきる前栽　晨
菜塚に寄る水はらや桐の花　東
まろ苦乃さとるれ立る清水風　蕪
月の秋乾につゞく森の紫　知
言葉はすてしらるゝや秋ほとり　杜之
山鳥の声トトノはれて若紫の郷　晨
かゝる人をこはくや古墳の井の底　里人
めぐりた僧する水鏡哉　知
砂すゞや芝ちの妻の刈おくれ　、、

あらたのよも刈をきつむ花の露に
半化のあまりに送別乃人葉と更かりて
こりまや中々月も移ひて帰り
なろかりしめり思ひ身の心かく
すり鉢の中に秋をお待ちてもいやさる
いろいろの人のこゝろに剛なき　丁
供をあつて　知
又あそびのりあそ媛に秋はる筆　長成
たゞしあさ膓にあそびまさし　八朶
直の古家杣子を新に立かけて　得蕪
刈る身にあまりしの身をくる
浪橋と路より月の色　成

若竹のかきまた枝乃実をくゝく　知
濱依乃佛彩の跡をあらつり　蕪
新年のまきれさゝするらふかし　栞
あらぬらり蘇せらるのくれしをり　知
築て鄰る中らぬらりいふり出す　成
松たてる君ありたらふく海のまゝ　栞
退留ありのむすゑん引ときる　蕪
爪金乃ゟかりに真きを額つき　成
継さへつきにはむきむしらん　知
大般い乗乃延もあのりゟり　蕪
車やまきるゝ総をたそ移りに　栞
月の嫁兵村の人女置つきそ　知

紺屋すまつて元のまゝ移る畔豆　成
四井村あやしく長き夕霧に　栞
あり継らう下部の張立　蕪
かしゆく號をの例を讓たてる　成
きらの水ましむ指乃ゝふらくに　知
青森科咲海乃は蒼のとられ物　蕪
ふんどし黒皆ゑらふきとふ　栞
今めつの松を祀る療大舟のはまりて　知
留まれけ乗する人乃かゝきぬ　成
柿の花ゆ苦み空ちの雲の有りそすゑ　栞
御堯科まあ乃印紙ゑ手もしみ　蕪
時雨仰より平のつくる西の月　成

空蔵へけふも来てゐる綾子　知

湯泉ありけり宿乗しるしかへりぬ蓄　蕉

早乙女のはる迄合歓籠　翠

われくと松より梳る川風　知

一時ふり出る枇杷の清みし深　成

花麿めかり過ぎつ仍て讃め見せ　翠

見す鶴来山くる甚のこゑ合　蕉

松に翁當坐

蝉の声折の戸へまはる七夕の月　長成

すゝしさ也見ぬも京かし海の音　渇蕉

粂の嫁傍に蛍より柱な　花県女

蓑布や引たてめぐる庭椎さし　お年 てん女

志ら露もみちれてさく松の露　丁知

たまくり待時る本まなく郭公　八翠

まて鮮さえて飛ぶ流の巻を

彼のかみなきしにさつぬおしいとせ

あるゆとて蓋ひとすゝさき髭仍

知らす来られまれ松

見すましと月のこゑ出た汲家　八翠

かも帰りてすゝる音　丁知

禄當来す船のひきなみさりもて　渇蕉

涼しむるすゝ女ろ露をたる　翠

ゆの月おもの俤のとかへり　知

新戸の口に紫苑つゝへ家　蕉

水に生きしきれ秋のうきたかり　栞
名まし ころてそしる露と見　知
いろ餘私あ山社色も寺錦つうて　萇
むな算用の排をわめる　栞
素人の縁もよう出所か未まり　知
うれ座ろけ於る菌のいきれる　萇
繊をとくへたらりしるの月　栞
汐血汁つけ母房きうつく　知
膝と蓑がりつまろへもさせる鯨の尾　萇
去る秋かゝみ秋見婉　汲合　栞
蘭法つり肉素蕎も直の家うり　知
字をたらりしとを可路畳　萇

御身掛ゝもあやかく條出きされ　栞
あさけくよらし佐の架もの　知
兄もさのろきあ寒まりまちめり　萇
かぬ海けそう離く茶る　栞
剣五あて小前も来る名し方　知
山岡けの法めく六月　萇
樽箸も出行と其しおりあるし　栞
裏乃法後か面しくかれる　知
草剣しる風芸の称ろうまり　萇
日永さ斎に借折りこきける　栞
蓮もは鬱らる息の花うかふ　知
赤まゝさもの大刀多彩梅垣　萇

まくらにも垂る露の庵もけさ寒さ　朶
あひたくもなし里のきらつまし　如
きらはらちら枝葉もちるもの　茗
花のにあらの実蘭もすむ　屎
家数すかなきまとめの古野嫁とも　知
嫁女からぬ　桐乃　書付　茗

きのふのはじめ追悼

合歓さくや中をたつる人の夢　蕊竟
立ち出の雛無月家も五月雨　要五
様子乃はなけりさ妻の枝ぞ　得蕪
秋のの夜かく　わかる萌芽　丁知
はかる枝の中も月雨りんき　八朶

くりくし笑へたる納哉

咲ちらし様ありしかも秋の月　青牛子
はらはらや東海道にちるほどと　麻交
西順せりつらくしと咲みせる　有月
蓑藤の葉をはやりの秋の様　平出
萩の花よし言はれ様乃様　素桓
松乃声もはなやぎ春の如　芦窓
門は秋桐のたら寒月秋ふ　里竹子
はたこうとも桐の声の月　大市
里人の先へ回ても鴨乃声　起肇
西新の木の首にえて子観　松拳
季の日やまかるもある女の妹　清響

月と秋ふところに欲しさよけり　曽阮
野らつてあるゝ秋ほくさ露のめる　李雨
朝霧や月をさすかの一止　一正
すゝすゝく成て経ける萩の花　牧羊
ちる萩や人のあとにも露かちら　梧井
露落て人味てある気のあり　菜頃
芋のたけほいはる田の畔　草丞
枝萩や一日ゆかぬまゝかする　亀得
家見る秋すも竹のかり浦のかれ　一閑
網干其也橋の舟の動きかな　九徳
秋ほへ秋也穂のたはるゝ所　栗庵
あらふしやなのこなる漢船　草宗

見ひん秋つし青で萱つむ　ちゑ女
けしき秋もあはれし秋ほ行し　玉映女
萬代の酒かけすんてかへつてさ　章瑞
蓮青ちあしあつ雲の月見哉　帰凤
ちるしも雲の秋更ゆの　太嶺
ちるしし雲のえかり萩の花　雇松
小林のうらへかへて花のいろ　少年 和吉
あけるうし思ひうら雨新月　諌圃
深て生る実竹萩ひ一ツの菱　拖儀
中ねるの萩る花てかゝる蓮かれ　蕙畝
ちらく生て秋林の気をつかゝり　松什
青里秋露をそ出しより其　其笑

夜長のいつまでさかるはつかな　芝耕
山彦は梓のさゝやきかへりけり　老阿
てらしくゝ朝日に向ふ百合の花　清芽女
さ部さ人のまぶしや本尊さん　蔓羽女
神楽や月夜あかりも明ぬなし　遊芽
入梅也無し抄ほ[illegible]の花　文舛
木のあかりを潜て尺る紀行哉　不克
わらの結の緒のゆへすくはわらの　抱節
関寺や大根乃出来や春の月　柳稲
小庭の花ひとり咲く木槿かな　惟州
木の様は落葉高く見ゆるかな　禾葉
かし[illegible]も夫はそれぞれ廿日花　六吉

手をはらはせ世の茶やみて小家かる　茘車
出膚也浜海て置瓶の水　松固
星飛て遠くなる藁かな花　半農
花てらす月の夜の露見えけり　受月
望月やさつてかくしてかはら　揺芝
唐曲家へはしらせかくるその色　小柄
夜寒ともくてかるゝ也蓮の花　安枝
起こるやうにしかかれし家の内　里恵女
袖頭人かをりく見ゆりけり　柳丈女
萩義ありむく花さ夜秋情　内美吉
流法其の梓子かりてすみ哉　菅孫
紫舟哉の出尻岸のまゝたうち　魯蕎

春雨に遊びてあはれ[illegible] 有声

けふの秋やあかり[illegible] 蓮佐

[illegible]の[illegible]も四月の[illegible] 柳守

野の[illegible]の[illegible]春の旅 英之

[illegible] 草窓

[illegible]の[illegible]て麦[illegible]板の奥 南山

[illegible]や何もよらぬ[illegible] 瑞皐

[illegible]をのけりつの[illegible]すみ哉 岸芦

里人の[illegible] 梅丸

[illegible] 青羽

[illegible] 鳥白

[illegible]に松の[illegible]や[illegible]すみ 蓮西

黒鯛の網を破りぬ秋の風 巨舟

柳葉に[illegible] 丈河

[illegible]月[illegible]の内 一草

[illegible]里あかり 如柳女

[illegible]の[illegible] いさ尾女

[illegible] 杉枝

井の[illegible]根や[illegible]の[illegible] 梅[illegible]

[illegible]や芹の[illegible] 山松

水[illegible]の[illegible] 岩淡

二日月や[illegible] 松黛

[illegible] 荏中

[illegible]の[illegible] 抱兩

冬の日や時雨をためし庭のかけ　怡粟

明ぬりあふぐ古柿の芸の寺　嘯雨

白き実を露にも摘む杉の栽　芹坡

鍛冶の火さへ好ましき梅の華　恭人

志賀の都や関の川きの吹明り　吉晃

なかなかに虫の音ありて桜てなし　貞信

あやなき梅枝の水乃古けれ道り　玉桂

なきの秋船乃小屋の志ぬ前　一星

ともしび竹の静かな桔梗の花　一徳

蟷螂や星影町乃なかなかし　暁河

都の月や気もり見る緒照ら　思声

悠然の暑気さへ涼し会の毛　杉露

粟糠の捨ところなりかけす瓜　和張

昼顔に組や葉月も朝顔も　菜丈

霞む日も又人呼ぶ声の新酒哉　耆梧

白妙の竹るはしの春なり露いまし　竹露

時々の菊は峰や明けし蒲のより　魯洲

花の水都の出かねし中の郷　儀山

涼しさや陽と照る月かき　指水

朝夕や涼しくたつの宿かな　宏左

初秋の月見てなほ秋の山　夏蕊

虫の音も又物聞も秋の月　有濤

涼しさや色も何ほとの雨　茜玉

紅葉かり見れば紙の音のゆふべかな　桂花女

待ぬ鳴る里からもあふて菊の宿　凝雲
蓑の先露のをくるゝ小萩かな　佳兆
都路の子供ら携ふ小菊哉　少年 梅笠
秋の風すゝし紀は見て気かゝり　粗文
虫の音さひしくも荒らかに　花好
麦の穂も下ろさぬうちや子規　止足
三ヶ月の影まても流れる哉　金芽
月の縁月の塩けむりかな　茂翠
寂舟へ千鳥の声もしくれ哉　琴甫
常つきと見し雲や草の露　二蝶
松原はさひしくなりや虫の声　篤至
秋やくしとあひつるや草の露　壮之

さひしさやかゝんとうゆうはあかくり　樹一
ゆりさくや様ある清の水すゝ子　香月
出るや見ると見てはなれたる　春坡
名月とも分けゆかの影　陶ゝ
都の花松原へ明り　清匡
あらや…の　巴東
粟粥…秋の…　白紀
冬…の…　瓦峰
…松原…　茶静
雲…の…　蕊阿
…月も人…紀江戸大坂　憲齋
杜鵑…子は…　千蕤

麦の穂のつゞきにかはる菜種哉　斗筵
若草の露は空へもどりけり　卦童
三日月にゆるむ縄のたるみかな　季席
咲かけて一際さびし冬紅葉　羊丈
あやめさくときは樹をきはしけり　吉良
山吹の細うけるや后の月　玉甫
むつかしと観て見れば小春哉　北元
山里や非番の太鼓聞かぬ所　丈雨
秋の夜や世に喧嘩の声けしかし　道詢
汁の風味も是らしき大根引　一拝
明月や赤豆汁の煮ゆるのに　了輔
州さしておもむく方の木綿哉　樹山

出替りのこゝろにせかる萩の露　誉笠
松風もなしにかへて吹きわたり　梅窓
月はの木へかくしてや秋の蝶　蔓物
花の雲香はあらで山路かな　雁叡
秋の夜やおもしろ川原あかりかな　一具
誉をのもとにくれなゐ枯木かな　何丸
文科へ落ちて行けり因に掛　硯翁
ゆふかけをゆり捨ひたり萩の花　習山
何かしと振袖の枝めしけり　大梅
けふもまた呼ばれて栗の花　一蕙
あち取りんのあげるゆふべかな　應て
月のさびしく流るる清水かな　楚莛

ちるはなや降くだりける山の水　去流
おぼろ夜の月何ゆへ行り思ひたり　貞按
縁かけて稲のあふれや夜わたし　風石
起まつて見れぬ人の後ぬれ　之減
木槿のふるさき咲きあめの中の花　向光
花よりも余りつくはならぬ　流芝
梅の木の咲かぬ事よふる小雨　汝露
初花や今も桜の花の露　維琢
此のころ桜の花の散りけり　笠雄
江月の杉にあられて散るなり　徐全
折花をのぞみて行きけむ花　白桂
此のまま花のにほふ栗の花　一兆

降しきる雨のすゝきに萩の花　石鼓
隠居先来て夢の世なり緑　丹波
飛の下しの付まで越夜桜かな　全曳
見る里を山けて雲の柳かな　両笑
去年もかゝれや竹に花の乙　洞天
藍引て入の川にすり月影　一峰
瓢乾く垣の栗を買ゐより　楓下
京にさき花こりもはける梅の花　卓洲
行しく秋の紅葉や草角に行灯坐　傳風
牡丹見るひ袖の若葉中よさ日　一嘯
藤新見に初てしろたる袖地　蓁里
しまもしいまもけふのよ杵の花　百羅

はらつくや宵の松明の蓮の露　亮以

落穂拾ひや念のこぼれし人の後　花耕

手綱ゆるめ門へちりこむ柳かな　梅月

隠居には淋しう見えし梨子の花　雨旅

笠脱て来るをいはふる梅の宿　天年

ふりけや乃鶏の声を庭の梅　南畝

渡り出て大寺見ゆる芦かな　万里

笠の山ゆかし木の下の華　湖中

見かへる家と先梅の花や前くの数　四明

来る人の舟がりかゝる芦の中　松保

出かはりや菜の花のはるかに　田禾

流れ来る落葉拾ふ菊畑　唐白

乙鳥や昼帰り河すゞし甚白かな　芝蘭

桜の花見人の手をわけてしかたなく　石恵

照る月を家で見るに涼し丈月かな　案窗

夕暮の月のかゞやく有明の空　且松

降り出て蛙の声や紫の網　酔車

花の夜鶴の鳴く腫れしかな　素琴

白露のしたゝる山の草の葉のしづく　岐月

仏前の香のかをりし萩の露　雨錦

波若船を引あけて見る夜来かな　敦丸

松影の月ともしくる釣舟の中　居兆

高嶺まで見しれたる魂ぞ寒き　英記

ゆふ月にかゝりし夕暮の花ぞ咲　葵池

ゑしやかひや[illegible]はまれて明かくるかな　八木

入らかうの月や萩ぬ霧らし　甚成

大根[illegible]の菜の地菜のもの　鶯渕

のそけて根ま菜ね[illegible]鳴　釜秀

惜みまて露のうしろの葉は居る　亀山

かゝ秀の添へる良乃かゝりけり　蔵六

草まうこま根は[illegible]ける[illegible]　嵐翠

戻り[illegible]寛しかり[illegible]依りま　丈叢

[illegible]抱直しかりまの声　楠山

かゝ寄やまゝゝくみ秋の明てある　里秋

あかりかてかゝ生ぬる移や[illegible]　翠兄

あかりしや家まゝし花松の風　巻ハ桂

[illegible]いあまた[illegible]しむくけ[illegible]　菜良

[illegible]や[illegible]のかな　松示

[illegible]の思ひ[illegible]や[illegible]　鳳雛

[illegible]い入って[illegible]秋の[illegible]　方舟

[illegible]のちしあまて[illegible]　正

雨まちしかうた[illegible]　如蓬

[illegible]の[illegible]の[illegible]　素人

[illegible]秋　幻芝

[illegible]の[illegible]　紫松

[illegible]や[illegible]　文子

[illegible]の[illegible]　其餘

[illegible]の[illegible]や[illegible]　由丸

萩の露かしこまりけり清水哉　玄碩
ぬれ衣もねぬ日もなきや草の葉　柳川
まちまちに出て見る門や柳かげ　何好
わか舟やかりの名ごしる手の行かり　東風二
華やかや手もかけぬ花の庵　井水
ちらりちる落葉なりけり梢の井　竹丈
暁は十名乗にして松の秋　雄姿
ゆるされし冬の松のえびす神　亀石
松の声やおもて宿なし川太鼓　正送
中ら移り行や茶からあまり庭の陽　獲川
春雨や三軒はなれる清さかな　治明
すゞしさや花雁芋とも川の月　柳篆

清くつきり梅さつる毎の柳の枝　青岐
瞬きや草みしらぬ妻の草　素介
かゝる時は暮の高すゝき梅の花　孫山
立かへり見れ猶つかふ五月雨　斜道
葛の手のねかなくれつくの花　永寿
鑿しぶりわが暮の桜の萩　浦人
鐘の音やうらかれ夜ばかし寝はいろく　素英
花らみる鶯からまる日の光　阜堂
大秋の花まち里のかんまとり　木架
九木橋ゆけ行してある隅のすみれ　菊耶
稲ものも後の夜の月見哉　霞洞
物買ひで松の雨やまだみをり　汲永

春まつも霞はやなき月の雲　舞之

のこりし流れへ山吹の水遊び　祁六

見なる気でゐ隣から出る牡丹哉　二品

都出てたちさまよひもちられつゝ　雄鬪

ふらんつみちもある人ら枯野哉　日人

麦あをくすゝやなかく荘の朝日さし　茂推

ほりの手やむしりためたる蓮のとも　业演

ゆふ日や傍岸の落ちあまりうけ　西舟

西秋日より旅人あちにおそく見へけり　務里

ころ都の秋鶴の涙となりにけり　完甫

梢出し蜂鮎あてさすかも哉　閑那

字白ら飛来の初音つかれし言葉しよ　千崖

ましかなの吾妻のつかに京都の戸　風之

さくらの花見秋風てなみゆへ　楳岩

あかんへよきうりも新茶あらしの咲　閑秋

吹折る字に雷鳴いく杣暑気　蕨山

鄙茶に出る青なきちまくな月　蟹守

散らさに紅葉の上に秋高茨　律朔

たちての飛の色猶人ある白秋の家　奇淵

字具飛来也藤改兼露縁　萱乩

此一折は笹の雪へ卅書の

はせをの集画のさまざまを

是出し始るかみよりさ木を常
世のならの恋さへかへりわらかいの始
始るかさ那木よりての来りら半本数
鬼ちなる梅より籾種の芽をとく
蔵入りし出種城婦申ては捨して
植の如くしと茂りたね分ちみ樋
仍有始　有像のまゝし本縁帋
楚分ちゆむしる　の嘗出法
手の方の藤立たそる及裁し
小家く挿木ど扱ふべく　り
佛ち付日荒始先み折ともしく
まの決らく自ちもるかぢある

八朶　幻芝　丁出　朶　芝　出　朶　芝　出　朶

おもふ事弁ばかりの気色也そける
よけいにまつくまて笠を負る
念仏のおほくて出のさくらふくり
矢箭出しも鎌かくひけ里
蝉くんたち粽ひからねぬの村
月も小屋をかけて花の東舟
柴部し棒きるちいふ花の名さし
加くしも藤よし床まま折ふむ
まつ時伊本つまの居る本綾名
はれくまり薫しは浅しくり

芝　出　朶　芝　出　朶　芝　出　兀峰　丁出

漸出し月も宵より雲も子よけて
うるし兀てかうかん　ふもとまてもなく
湖や荒れに見ゆる船の杭す
石垣りもまた禮記書ても
菜の麦すらに晴まるこころ
鏡あらずの名残母とらへ
何かよむ恵比須をまつる
つゐの節か来たらんて来る
鈴鹿伊勢路の秋涼てよりはつ
半季代らはは竹のあく
かり寝もたんとつけぬめくしる
茸籠捨てふらしと出家

朶　峰　出　朶　峰　出　朶　峰　出

秋たちて砂にも気持生れつき　朶
裏さかも宮の月乃浅草　峰
まつかけの振舞さまるも茶菓子　知
草鞋のかれ竹の使先　朶
影沈みたりしるのおもかけ
あれもさすか襟し去てゐた先
かつしかの荻秋も張も夢のふし　約芝
あさかほやかなしも置物緒のゆゑ　兀峰
無尽気負臨つるやら本のしかき　丁知
枯芦や蟹河ふみ行える仰の下　八朶

日記のうちに書ちらしたる
手紀をあつらへ給ふ深得　蕪
八朔の羽織に漬らし鍛冶郷　白起
しけれく搖の日次第春遠　八朶
大写も志く所伐に在肖答に　蕪
新都の恥かな得りおもむき　紀
幸気に浮の小幸も引さけて　朶
いまの暮れ莫以夕にれ　蕪
事多き納所の窓の明殺し　紀
慕り姑しも乏き姫　豆紙　朶
各の日大刻に於そとのかきさ色

大工の音きれ藻子なりまる　蕪
うたうらくうたつ鍬あと地の割あかり　郁
賀茂手鶯猪てつうふ灑　蝸　由董
出穀八名とり男の老めて　丁知
おもかくしと芽を得る月　紀
通り路の婚は其ふて押倒し　董
拝みそ為りより野ある　出
魚座のさ座り藻し花の枝　紀
掃除をの方の絵の奈良紀安　董
知さ更手向也くる我乃警　出
すた組内も鮮さすく京念　杜貫
桃折の苛好ハ今ま姫色も称　董

ゆうてとおりふ　時雨も　萩のちる　起
紅葉するうちてり柴の秋えしめ　賛
鶏とほ遊女の衣乃きゆる　出
面白き乃きまれても暮れてふさき　起
夜寒　都てらふ夜　寒しま　誓
世ふられた紺絣の華足　拭出て　出
らふれ条かもむさしとあるぬ　賛
月つんぬかふらさとくるまちれ様の編　誓
津の　さめふ氣しも　古郷の　ほとつま　起
こうすれのもふあらかれ芝居をし　賛
わかけて古郷と　ゆかり　かる　出
綱元八搗してもきゆるあり　起

乗りてしらすつらふ洗足　誓
蓋の笠あふ姫ましもりおまへ　出
まつりもみてし背戸の萩荻　賛
楽みねなの動かぬ梅の一葉かな　由誓
月寸萩ちむ墻の面したき　白起
酒瓶味噌つくらせ乗膝もつめて　丁知
竿の中くゝなる手丸　誓
夏もちられたし大方紀舩お合　起
ほそき　鶉えなくきゆる　出
ちゃちるふ木札きぬ纔見を集下　誓

ことさらに花はくりまどはかに　紀
濡るとい折ふし螢も絡まりて　出
霞みたる光りすゝむ盛ん来の子　哲
満拂も毛つら冬へのこゝり行　紀
見てはおくれ給ふのり志て水姫　出
石濱と月の後取の涼しさし　哲
かりあまきかゝ叶らんの丁　紀
彩錦の織も四五絡まりて　出
釜ちる見えかね　時代のへあふ　哲
板の写も拭ふ人のする茶の朝　紀
格子の緑子越つめて人を拂く　出
是わの花の帯黄の其めんで　紀

道花の傳ものから　葉こしらへ　哲
本の色はまた絵る節度上す打えとり　出
国々かり〳〵はおりは　汲会　記
ささんつ其も気形折さる赤穀お揉　哲
時分の夕陰〳〵すゐる　後見　出
床中は　断　あのきる森をえし　紀
風のめのり〳〵よりる向う　蓮　哲
挿ても出て垂く久のる方きしも　出
床の花の流をあ見えかゝる　紀
晴れり給ふ聞けば開の名所月　哲
めふらぬ〳〵ゐ涼姫　殺りゐる　出
錦船見徳まえ　入へ　世り　紀

なかに萩葉に露ぬれ 蟄
大かたまくらゆるみて墨の針 芯
あるかたへあり汲て鶏日 苞
宇かれ地のたまゆら花のあまきり 蟄
ほりつくあかり乃 暁 芯

丁 芯

未雉や櫨り鳥ありき もあり 杜 焚
うはらもうち根 まことの月 由 蟄
芋洗ふ尾の水の 情 まちに 芯
かゝけて 新人 初 連架 焚

第はむ 芦き 野えの 蕪 蟄
言語甲斐の山もある 樓 応 請 芯
あらはれ人 ひとしら妹 焚
統 お手の袖の 役の方 れきて 蟄
様 もちぬる 梅 酒 芯
吹かれ 悼り 同 唄の 吉 焚
あめり 清き 相 紀 赤 寺 蟄
自 安 辞 いさ 志 花 芯
ろ 子の 舟 和 かえる 焚
志 かさりま 日 役の 宿 蟄
学 儒 四 玉 村 芯
唄の 桜 乗 供 焚

押しあふて波のはなれに泊かへる　哲
乱るゝ糸の出入の雛も室寒　覚
ふのしく瑩を三条に塩たる　出
手毬さけて〜ち地頭かた　哲
養ひつりけし枝の法乱し梅　覚
燒餅もとらすと衆の小春めく　出
二人かけりし庵に住りをれ　哲
両隣から呼たてゝ其の附ども　覚
蓑藁もちは鍵もふせる寒あり　出
擂りけの飼あり茸萩わく片体に　哲
卞撰の志め念々気候る　覚
春野もすき茶月の豚　出

後すゞしきおけ蚊蘭やかをる　哲
秋ちかく発句覚ゆる雲の峯やし　覚
みえかくれする椎の木ぼんやり　出
まぶしの灯に出合てよるさかり　哲
とりもつて掃る路の小けはき　覚
笠さしの中も手ぬくれ　出
香に埴の隙より　哲

四　哲

花よりもの牡丹の蕾かな　哲
日の傍し出る風姫先乃朝　丁知
波緑の氷を流るゝ　哲

捨して見るらん花を守ひとり　出
露継ぎける笠えはなち月の出　整
比べる中へ加へけり牛　雲　出
すり先の名残寒相の手拭青く　整
未出し拾ひつゝ鮒も釣れる　出
亡骸の身より菓の香あらはれ　整
彼艶瑚にほりる絹の音　出
言りやるすりあるも雨にて通り　整
落しく物の見えり加らする　出
雨寺して千鶴あの之田忌　整
帰り仲出紅やり放く小法子　出
節回りたる梅まちて彼を抄記し　整

薄ら有り打ち気短く年の手より　出
自我出ぬ一筋も此紀花の中　整
あんてしお来ての紀去ての人らしき我　出
子の主志て返して通る浮身拭　令
尺ま親娘多我をつくちり　出
根掛子の猿の法井子掃除て　整
要のぬけし飯子はしらぬ　出
いかにても痩れと茶花の路なくり　整
戸戸の多さり臭うるあかるひ　出
我水を志中あつら床几引きすりて　整
香過ちに梅の花香好らしてする　出
茅有らし葉さうりも苔の網えうり　整

まだ新酒まして粟も揺れけれ　埜
妙の撥の砂も囲まつゝ月影はさく　知
のちの彼岸に出かける護符札　埜
きらりと次第の用は済らんで　知
反古のいろはを引裂て鴨む　埜
まへ曉月様子の窓も明けかかし　知
ゆかれ去なくらは絆る居ふく　埜
古き豆も緑入方すみ花の出る　知
妙なる身を清くし庭樋の走る里　埜
盛りめしさ都の爐しや芥かな　丁知

青からすまし縁さきから秋さる　由埜
新枕月の汐みつる夢の床よりて　知
殿原の桐油の窓わたりむ　埜
瓷の鉢かるたつまさくも月なる話　知
嬉しも飯まちりなり妹麻売　埜
新道はいつもゆるなれ盆のうけ　知
常備火の書読みしつる　埜
芝居見て手紙にもなみかり引かれて　知
雑に揺られ去なれる出青　埜
船こともいつまりけるるを杉の影さ　知
月の畠に加へて水鳥　埜
菜の京ならうちの一網揺去なひ　知

貝売ぬけて京の[illegible]く　整
[illegible]東屋て出る[illegible]刻[illegible]　出
[illegible]あれの[illegible]の[illegible]　整
[illegible]も[illegible]井の[illegible]　出
[illegible]子の水[illegible]　整
[illegible]けて鬘を[illegible]貝[illegible]　令
[illegible]の[illegible]　出
[illegible]の[illegible]之　整
[illegible]　出
川を越[illegible]の[illegible]　整
[illegible]　出
[illegible]の[illegible]　整

[illegible]先の[illegible]　出
[illegible]月の[illegible]　整
[illegible]小[illegible]　出
[illegible]　整
[illegible]来る　出
折[illegible]　整
[illegible]の[illegible]　出
[illegible]貝[illegible]の[illegible]　整
[illegible]青の[illegible]　出
[illegible]の[illegible]夕[illegible]　整
[illegible]　出

友萩の蕾も赤く咲にけり　因誓
たゞ清れは幣ぬは鳥　幻芝
まきりに志けの茅鶏引とゐて　丁岱
魚撰りは赤松のあつしへ　誓
麻をむく音ゆ川よこる月　芝
鮎来て茶ゆあつゐも言は　岱
手紙とめて虫を啼もきしゐ筆　誓
人新あき古籠たゞへる　芝
は湯りもゆかりと出来る飛多り　岱
志南のあさり帖いさまぬ　誓

節分の豆城内御でかまへ寄り　芝
おそしてみゆける炭のつき足し　岱
よく新井石もさらしで済む月の照り　誓
秋風宿りまちかりほし　芝
茎から豹買出しり古宿相　岱
奥への先へいるふむ巾着　誓
あつ落り来も頃以撰たぬて　芝
御もほろし行ける枝し紀　岱
出代のすゝみ旅つて屈し程内　誓
なほらくまいくぬ立まつて　芝
杉飛来ん辞も洋るは城ゐて　岱
雲陰つくる地変をかり足す　芝

水引をほどいて来るや鶴かけし　埜

骨折はあつさに付てゆく　出

ゑんまの咄すれぬ町の花盛　芝

手洗の露も北へうすゝく　埜

せすしえぬ隣村同士の裏合せ　出

ほそゝもかゝぬ覚つるいのちへ　芝

中はしてかゝちの志まぬ月の露　埜

かゝり ゆれるもいやぬ来る蝶　出

門前は稲の採れるしに湖沙　芝

からも見けり身情く穴覆　埜

裾中すてつくり見出往核葉　出

晦日は蕎麦の買てきれ残る　芝

寿ゝはしの仮月芸の宮出寄と　埜

美山に稲も霰む晴るゝ　出

採　叙

ササ山や山本回たる杏子を探の寿　幻芝

杏林に穏りを蹊の杏に火串ゑ　壮斐

雲するまのよ杏ゐる夜降り花　白虬

縁ねきや御は本の背の子吹く　丁出

花の新規の中に洗ひれ去る水　両埜

ゐられたる京のさん文字はなれどもそれまでもなく
道のちまたにも抄録つゞりて記とさりは志るべをも抄自なる
あし書肆志まへるはなる俳諧の句のむかし
誹諧をあつめし人々がおしみてり雅松各翁
の俳文拾て見る句とも稿を集めなきに其の獨吟
遣ししみるり人の業静なる書しを彩書きなる
ふるもなかりし撰しく集の名は力根なる日記など
ての後の濃なる志たまえまうけなきんためと思ゆる
とも記し紀業になりて先出し丁出の書なる
をあらは是言祥に於天保の末の中さらなるに
念録なるなかるべし

雷堂麻史

一二三

西上人の歌にいはれしわりしとなるまつりあり
まん人しおほえ侍りしは出し時は遠るめりくなれはまな
是年程に于して時の句ありちのたには月をはしひかり
ちほど蟻月に拿遠ひにかくしてみえ侍るべし
あるて中ちにをおのが神をたすべき俳丹を
とみ字治もすゝ竟庵季わけるは是え程
の所から称盤棺精の中なしてあれるたいらぬ之
されたあまたよりたにかをかたら寸あるふ
ませかはりて志年に店きし旅なとらは
も弟姓をもけりか傳かきをあゝされたるいか

かの七ふ出の猶よむへくもあり倣へるふはあふ寸たて
辞りを傳ましてすれあすゆ仙へて七ふ真
似せすや給ふ事あまりあり

壬辰晩夏　　　路考老人

あけしの露に萩すゝき一畑　　沙路
稲の花出乃落るしあり　　両后
枝枯葉のあたりいつより寒けりて　　鳥津
あたゝる汐乃てらつきらやむ　　路
岩ふちて岩ふへを見たる岩の月　　后
秋のふたりか仕入いちすれ紀　　津
肉方乃語のつゝめるすゝて彼岸　　路
茶つちりあらぬ六緒の引出し　　后
ゆふけふ舟ふ船路のきつきたて　　津
髪の女らの宮る日中　　路

夏はき孫ゝ子の蓮葉に仇ならひ
江戸乃酔たえぬ人に交はりし
田子猫の肉屋ゟ出る香り月
霞みにみゆる芝葉屋乃しも
何所ぞ屋も出さる京都の泣遊入
のがれ屋にさへも置　佐
花さかり役者の播乃人たかり
永い日あし乃後も年割色
二ッ家にあつきし離の家
有りやくも太らしし有り
駈あるる猫身めぐる松乃皮
十九出開に雨ゟ一日

后津跨后津跨后津跨后津跨

縄えくくつる人目ぬさの波てすゑ
二階の下の志れぬ　峰　聲
あちち喰らうちも喰ふにも出放題
看板さめるいかぬ口あく
落ぶれて志かり暑明月
ゆく先ふくを遠りまる　蔦
芋はのりとれる愛もあらし紀
門徒見込似月　寺乃　執持
忘るのをさらへて掃へこなれ色
生枯葉のきりともえつく
彩の角銭あふ屋る渓のりへ
糖有合の細工は蓋る

后津跨后津跨后津跨后津跨

薪から花すて志つとこひつかし　后
なれし見ぬ中に出る　苗代　津

淡路　而后　鳥津　黄山

各十二句

川口や高似するりし子　而后
年刻こ以ふ百も永き夜の月　鳥津
きりつきの鞁ゟ纏武たてかけて　黄山
魚まこ取また多すそゝる　后
宵月の影もおさまる西暗り　津
あふ手弐宛とり　入る梅抛　山
性蜾の屍を浴ころむ霧雫　后

箪笥挙りりつらふ梳箒　津
とれ中私小豆蒔く人ゑ扱ハ色　山
十九の花のたてる大とし　后
なら都殿さ豆管の冷つゝ油足　津
鷄ゝ気とつゟ宵つ帰野子　后
老んまん似も帰らぬやあふちゝる掃し　山
二番たちきこから以へも言料　津
お便そ裸て起て月とまる　后
折の法り蒸乃間本しかり　山
瀬鳥も高れて接ぬ花さかり　津
歩くも旅年の法く嘲り　山
日の御子ほこりの見へあくるかさ　后

ゆるはあへたつ忘さぬ水瀧 律
物いひの小路ゟ遠ふ風呂の井 山
湯銭あかめて汲ける月 隣 后
作る字ふあれた茶字も直きらふきます 津
たゝきありしく心 翁のあゝく 山
肉屋出来ふ湯具を結きぬ立ゐり 后
髪をも剃ても八つふまて 剃刀 津
大家ふふ書院ん 八五軒 一つゝき 山
帳子きもて定らき 糖 梅 后
昼とり も明るん身よ本色の峰 津
麦葉戯法ふ 河 岸の多粘 山
糸全も針路の 切手も持ゝろし 后

みさくり杪松の出来合をかよ 律
腰き縫さけるをほんの瑠りしきく 山
裾ろうけしのあるこ祝る町 内 后
蛍篭る一本置よりのる花 律
よんかりし 鉾る海乃 娃子 山

而后 鳥律 黄山

各十二句

具るやしてけあく匠ゞ苗一把 而后
先ず生月れ積る 法み たき 沙鷗
藤篭居ふ園所の諸ゟ裾果て 后
ちのさん 旅よ沢山来 綫 鷗

くまなき霜に出てさへ月のあけぼの
子傳ひ峰て森乃下刈
媚なり菴屋の者も出す手提
鶏なく声々の窮たる気
審いるや甲斐もなき片見なれば
声つとひて庭藤をかく
水乃峰て世名早く消よかり
古城ありし跡ぬ火焚たり
めぐる酒あかり新そ殺しつる
下駕籠抗乃傍らりみちも度もなくて
ちよつとすゝむる卯月の礼の傍とあり
まつり尾乃ぬきて 東談

后 跨 后 跨 后 跨 后 跨 后 跨

盲者か命なりかゝる花さかり
舟の子して京乃三月
むかしは離の盃さし大遠ひ
まされや小判からしくも時
置所のまなきまみの柄ふくる
村となら句もちぬ不勝手
入うけて水飲よ出る戸棚泥呂
来れこんとわらひ出てけり
糸操の奏羅も志みる八日なり
夜蔓焔へうつる 加 讃
雨あとのくらいへ衣あらふつる空気和
めしたくるりの好を保てある

后 跨 今 后 跨 后 跨 后 跨 后

子供衆ハ西向てすゝみ肩衣
たつたと汲つる水よ尿する
勝却てころもちあられ猪乃むれ
津まゐあそのまかけ絡侶但
嫐さしのふすいふる宮女縛
えのりありうる月やほろつく
かい解ろ母の好声恋乃ちり
常に揉てうける　青如
而后　沙路
各十八句

路　后　路　后　路　后

黄山
而后
沙路

山寺の秋や見るは菜大根
昼寝る月に指ふ庭まる
能売のまらひ人ちつと寄生して
飯つりするやうて未鶏かふける
さふしと云秋晴りたちすり水
角家に影ゆかた起て話る
借て来て身うらさあふぬ来綵物
何をほめても批せり畢にする
我川かつれ髪をけふやとし扉に雨

山　后　路　山　后　路

仲之たきみよ為ふあしらけ
立て坊医者の悪口はきまりて
箱たゝ隠れ出家ふ煙ム
甫案乃ほゝりくさふる月
本所の節句て諸分てあり
五十五の豐立派乃よ喜乃末
同商買乃此都り 別して
能波つ入てとすらは安いもいし秋
櫛さら隠れば浮れ毎家 出家
末ゝ年より十日ゟ 早は二番州
住吉まかりてすゝ月 定 齋
あちふかゝこちふ八尺之ね 薩摩

山后蹄山后蹄山后蹄山后蹄

間所あふ 草の古は 碗 第
駒千ゝろ御義理方を勤口
時近き知り 時近て とくふ
泥の深縁ゆけさんた祢 縁
ふ川とて 止まい 又あふれ 降
枝ほけ たあんの此ゝあさ小坂あり
ふゝ似こうほも あきえあきま秋
酒樽を 松戸さつ其蓋の月
追つゝ来けた 腰さ 豐らけ 墳
妙の色そを待ても在未ね 安養生
時乃廻りの 後 样を以て
五ヶ六ヶ 置乃ちれく意の中

山后蹄山后蹄山后蹄山后蹄

大白菜りのかたく竃以ふて置　山
ちらくと花も眠ってり寐ぐ氷　后
膝のいた伴し搔ぬ梅の芽　跡

黄山　而后　沙鴎

各十二句

山菜花やえ作り附子散する　而后
家鹿作り舟きとつ手かく難氣　黄山
籠入る我大事し来手よとりかえて　令
松味の鰥なとしの去る板切レ　后
出らりおむ手九ゆらかうて叙の中　令
膝手以るのよんおよ手家から　山

醁醾深き浄侶の庵いよとき々ん　令
仙宮へ七十の八と吉まて情実堺　后
榧子も伴しよ鸞雨乃緣磯　山
幸寺殺ひ手新麦を出　后
諸流れ何も去らぬら古以まの　山
あてらひ金の十日ゆる事し　后
うらくと豊乃小痕落ちを引ぐう　山
井にし姪らし戸から　来る　后
姑の嫁涅槃の雪私西更り　山
ちよんと蛙叔法るる　種蒔　后
月花手業蝋ひ乃去　不發　山
手水つうへたいりも日の出る　后

寒詣も敷てあられた枕ぬく　令

あやし直してぬける街道　山

襦袢から素裸にあ叔更衣　后

東から吹けた鯛乃ひあき　山

書ふりも橋の垢しい剥さりの　后

江川と蓋する雲の立しふ　山

涼咐て朱傘の度る出頃　后

たすき外をとふやくて剃　山

十月の縄か翁附によりたり　后

比し合いたね海のたくみ火　山

飛弾系乃出様の狂ふ有悩に　后

利歩子さへ出るに消るつふび　山

茶畑の書弄も森あけ竹もる　后

囲乃錦かすゝらり大川　山

黄昏は昨夜の宮く煙の光えて　后

本町の暑りの注へと底あふ　山

志つかりと五鑾の咲を見てく降り　后

蘿笠蜃の本ふ峰の巣こはれ　山

而后　黄山

各十八句

氷満待た書楼やし表の月　黄山

津あたふ分けて芬やく臭せ　鳥津

一旦寸乃十分年の飯海て　而后

とゝめらするゝゝあくのぬき身　芝石
佛陀乃むさゝ落る生墨之　津
葉月かゝやゝしと五位の照るゝし　山
出るて返尾子ある仕立船　石
祖師乃不思議ハ今もまつく　后
捨女子のいや庭いぬ天窓押　山
脊中桃をもつふ能り篦　津
立所のうち持て来て薄るもの思ひ　后
余せまの狭り来ハまんく　石
倭伏乃尾も有り薦番ゝ　津
病ぬ先より絶る寒冷　山
擢浦て波雨の兎も会上也　石

烏伐有りよこまた桶の水うつ　后
護广堂ハ新みしらされの不乱　山
中たハ日五丁ハ青麦乃中　津
弱をしの病ありあら礼をぬき　后
まめ安くすれ大ちつと出し方　石
以逢ても流ぬ一別をつゝひらけ　津
勢鶏の手当て乃よくも声　山
飛退て常育み雨子神戸頃　石
捨て遊る哀乃引あい　后
浮ひ出女も浪ゝふゝひ売　山
手中乃葉藩の若きんて孫る　津
返辞いひしむ手まりてふ身る　后

埒まで闇のある笛を手には　石

刈ものの條茫すんくし雪ぞ月　青可

稲は葉あしまけし志　早　山

憎恰つる子孫ぬめて行徒士の着　石

美りして寂に　鉄の秀枝　后

盆乃藥の哀やり言れもの膝のく　山

二葉出しのゝ秋さ　戸苣　可

山口出てあるを出そし花の雨　后

野路の蝶をぬらす　雀子　石

黄山九句　鳥津七句

両后九句　芝石九句

青可二句

両后

降歇てけるの黒豕茎類ゟ木

東扇に是乃つまる　藥　俵　沙路

茎呑ね寸　鶴の膝らけの様忘して　黄山

ちそつるんぬ宿に瀧あるに　鷄　呂川

桃の内　息枝のへ乃度るらん　桃鳥

つなりせらけ静あそて　虫　游　金拙

数とりに数ものい風に生鍋　五凤

浦へ飛して　仕着に　六　路の嵐　我覚

わる波生す素出揺出寸そ夜くよ　路

衣乃癖のつはさ手秋振り　后

阿保裁を平安の安うに飾あふれ　鳥津
田うゑすも中しへ大まむ麦秋　芝石
長虫の志うさゝに喰れ其のくゝす　樵
月ゝあつきし祝ゝあけるあり　山
蔵錦ゟ交ぬ纏のちらしく　竟
あらく通ま大綾てもすむ　旁
花ゟ来て具ゟもたえい同し新　大巣
木の芽うけさす塚のはおしり　津

百韻　沙路
退屈なま秘ゝ雲志てゝ水は冬
草の出まいりゟ鳥見まゝる　而后
行あ女し菁花の清しる風吹て　路
あくきかえぬもるりをはく　后
鹿うゟ青ゟあゝりの鳴るゝり　路
新まけしろくよまえや入月　后
椋買を其連しゝ島まされる　路
あのきたあゝの蘂うけるあり　后
六人たゑ五人手紙あくわやくまの　路

薗りを切きれハ文　菁る　后
蒸り飯をかへてすりたる只乃飯　萱　跨
来きぬら病た　夏も古俘らぬ　后
さつきりと田彰屋村よ薪も古し　跨
急くはふへ来り　わ津る　跨　后
粗はらくて衰ら　川は和　跨
汐物を跨れらすくり極楽　后
年作法か家のけふる霞初らし　跨
頭く猿もあふく　支乃手　后
豊後た流すり切り月　秋し　跨
平陽　盥をうちあけて　青　后
識兵まへいへた粉ら　六彼殺生　跨

今法もちつきて跨らおふれる　后
藪入の見れらも足よ動く漆り　令
呈儀振舞のらおり灯まらあらく　跨
銚きらり喰きらりしてちまる連　后
衣猿鏡の猫あり法　ある　跨
濃青乃ちひらりゑてらくもあし　后
まちへ家ゆらす立清る雲　跨
墳濱を法つりしも細りする　后
大鮮五十ちまは　衆陰　跨
拙竹の栗らひもよ屑ら動きなり　后
いろれは数寸　あらへ　禄は　跨
剃深たらちつかきらに思われる　后

ふりく枝生に居る あとへり 跡
非情にさらし月尺のはれとつ宗 后
霧降吹わける 滝田乃橋中 跡
樹に女むうちも流く寿能鮮 后
書かいふちへのふ涼れいつてやる 跡
はえつ身の肯ハ大うき華厳宗 后
むすらぶ答生た馬ま 乞きり 跡
おらちて儀へつぬる締あふら 后
浄布しよ 降し 雅重 乙 素 跡
ちんすると形の精を肩のかも 后
同花なつさく落る 善 挑 子 跡
熱評に生るまやりのやさまく 后

豊岡をいふと通る 佛 菱 跡
名利とひとに言非あての櫃棒ひ 后
宇佐たへ 鴬乃行に花さうる 跡
花嫁た扇にむきらとき紙屋川 后
言いまぶた利にき 摂 摘に する 跡
ふりくと路ぞれ今まう安形成 令
世とも加ふとも普請ちし中央 后
見物をひきて 猫乃たゞき 切 跡
矢立乃 紙を 猫毛 小便 后
迹ふる枕ちふ程 続て 閑にあり 跡
降らとしわきて ひつる 后
情に嘘ちの懺 悔の年をあらる 跡

ぬれ利と夜盗の袖ふるつて出る　后
倩案するにかりた二文をかへし　跨
弁当つく樽酒のちろりんとなる　后
ひきゝさ丈千鶴乃齢の尺く出して　跨
同し條の隠し也　口ふさり　后
面そ弄負物さけて差の月　跨
桃を洗ふ河岸のあさなさき　后
婕妤乃鞠あるなあて立て折　跨
上総張て来みしもえ完　后
欄干のつころり乗らへるあかき紐　跨
夜半起するおちの夜のうち　后
世の中は鍬鍛治なかり骨折て　跨

鷄の珍なきは直る出候　后
十日猿小まどひ勝乃丸て落　跨
おつ乞ろかりてけしかる肩　后
ん古人の昝のゝおかし詠以　跨
舟そ濡る大きる　大宮　后
まあちつて安るやんなりゝ沢くり　跨
揚ね雲雀も路ては居る　后
折とすり励る蘇我もまちし枕　跨
あみまて安以ゐ乃うりまれ　后
揺あけの舟子の出世の氣ふいつれ　令
とうかるもまて紬ういやつ　跨
かる飼もあ緋つけていけまちぬ　后

縦様おし也　巨燵ふくき表　跨
人の中関るりちかりしや乃出　后
ふみ入は己まの鳴き字盲目　跨
たつき今ひゞて直乃如く役　后
倍以鴨浜り参をたうるゝ之　跨
入海乃冬暖は夜寒し　后
這根つほけて一とろふ出　跨
手走肩り肘を抉き石礫銭　后
いそうり菊らず推車する　跨
上役の名さとり家よ月ゟ出て　后
凍へきりあゝ　儀式帷子　跨
革あさ筑の房りの馬業らき　后

谷のふゝきに欅とひたる　跨
共降の名りしよして晴より　后
暖笠篠哉うけける矢筈うしなよ　跨
寺子花く萸し菜を杉ちあり　后
走出茲歩して多花たちけり　跨
吹風に朝ゟほつとうつるふ　后
手乃ゝし鄉を入る乾き田　跨
舊史雪花たちま哉音の　后
源を乞しいま家人の数り　跨
いぬさゝのたちおき了なる　后
多し刻きゝ已て門人何楽　跨

みちのくにくゝる庵もとて
詠して遊し世をされけるかな 而后
老り揚あき通るす彩る霧さ哉 沙路
月うつすりと燈に都しの雲 月庵
名月の稲むらにしく揃ひ来て 黄山
薬代をのまる盆乃所すき 旭松
責あり砂ふきたてる松あらし 我竟
二手あまり宇ひ十夜の晴 桃鳥
たしなみのふとん戸板に干座け 大巣
あきまく乳うけ当世なし する 芝石
錦金うたはれた風邪を通
大くなすとかいはぬ山かな 金蕉

定宿は酒屋坊遊びはなかりあて 島津
影の下やそつふり 此峰 青可
身勝手を多く筋つけて積たり 五風
涼しさのうちきえ四つも赤く宵 梅裡
蝙蝠乃ちらし はれる月の晴 李曉
投出す豆をも中々たくらき 也 素汀
あら仕出しお細きかひの花の木 呂川
何乃たち世の事氷き日 東仙
世をすいかし家通る 名家 雪紀
名ある手いさゝあらす 文の
はしとみえても分さなし

田川いさゝか麗美の韻なき
ものへあり其句

波ちたしまさゆき海士か笠哉

芭蓮も落て戸明るや花の庵

家のうへて一聲雁の名残かな

跋　岸

俳諧は不易流行のふたつあるへき所を招てせ世よ
循環すなはち言事の力をしるものは芭蕉翁の論ふかつ
まれさるそのいよいよ論をもへとも早竟花さこのゝ
實哉こめむのふるかふんの二花は脈をよみこのしめ實は
出ゝんをたのしむ人のさ寡は同志の諸の勝をなの葉
山なる芭蕉の行を得かゝのみも新しけゝ俳諧は
彼実をむれ得てこゝん哉たのしむ人あかし是とも
ありけり叡むも幸玄なるゝまえ遅く梓にのほせよゝとゝ
すゝむるを許たち彼の浦人筆録

癸巳暮秋日

蒼乱

やふ入りあをる通ふや古椽　南溪

ねふんて水乃わくのきゆく小田　芹舎

年時るるよ何形とも云まし錦に帰て　梅通

さくらゆきさよりたるらいしまの浪　舎

蒼月よ奥義まかりき引下げ　荳隆

尖きたくあしの早りあはく　乱

名見幸もて気まかりに住みなき　蓬隆

いらひたれしてニヤる雑　溪

町内のさ活て液素をへりふり　通

抱佛よたるむ投屋の部に隅

箏もやぶろさうまて薮の出　舎

姿石振て老をあしまり川　通

大ふみ降き夜の月も知つゝ出し　溪

難喉渋く前よ尺る狼わら凍　乱

菩薩菩薩よ陸たてら守古侍聲　通

雀図あのしら清加まて年穫　溪

花ありまへ残常もおうへ強上て　乱

まつ雷もあり清ら走る良　通

相ねけも彼岸のうちいを免すて　溪

まけや子寿て折けねる有て　隆

ほ京まり孫よろ徊舟のたのりく　舎

納涼もしれの遠ゆる宵く　乱

炊かけし閂する戸のゆるみ　隆
あらつて見てもつかぬ魚肉　舎
嫖ゆかしゆりて後追ふ昼寝すゝ　隆
布子ふくらしきとりとすきこし　渓
人魚出たけハ和菓を押のけて　通
後藤所へあける金も出来たり　乱
油屋のあらつてたのむ江戸の本　舎
引板をもらぬの足ふぬてとりし　隆
買ふてすかりのてうき鏡台　乱
若衆のとまりまでうつと猪出す　渓
聞えしゆ申刻の太鼓聞え来り　舎
忙しく欠いて背のたちき茸　通

店かしれ花の間ひらすゆるみ　隆
細道殺乃たゆる妻さ抱　草
梅　通
三ケ日して岡見ゆる稀ノ秋　芹舎
背高幸乃のそる北かけ　南渓
藪入の独走かつてしみけさて　通
饒花がしらをそへと和菓とむ　舎
国りほとこのとぎぬ月の秋　渓
氷引菓膳に河鹿鳴出て　通
盛る人法生を遂げる古すりほり　舎
ゆふむかけ城仕来かし　名筆

並のうちに隣閣の上りら総
別荘だにすれとも我ちの節かち
わらぬ戸をあけしハ鐘る寒さ遊り
誂あけの流れをこすす提灯
ありあまはいつも年生ハ歩張るゝ之
かくれりやすき栗のうなぎめし
青へ行兄ハ拾も早く名を
あらはかくれてする名る土禰
めさしゝと日々らの花も咲かり
ころの年そも女安良塔を見ぬ
鶴来る乃星をいたゝく小鈴時
井戸を投てもさめさるゝ本る

渓通舎渓通舎渓通舎

あまた茶屋い中のめ城皆ら所茂かり
姫路つくろ表乃眉し
西国ち降夫にあれたる悪遊なよ
小ぶいちやうふかける暖簾
彩すれて楼入をさら宝乃かね
あまさへあらの希さ米かえ
楷葉乃わかく屋帝を買本家し
尾をしかる加賀の窓 村
波ゑつて宵とら見えぬ月の色
よいまさてまかる粕乃ねくらま
多ちゝさ黒路しく檜り出し
窓乃あのりのきもぬ暮ア屋

渓通舎渓通舎渓通舎

歯なきいまて頼えはらうる結なかり　溪
足はの外は袖も　たゝ　すぬ　通
躬勝手花もおつらりもちあるく　舎
子供衣手の葉をつむ　溪

暁月の末なきは猶ぬれて　南溪
汲合ぬ水隣さかて東風わたる　梅通
来りたる夜に北へと飛ぶ雁　芹舎
種蒔はおかぬ人も着きりて　溪
纙暖簾の汁乃あつ川る　通
降りたある雪の明らか箱の月　舎
あかぬ所を通る　庵通

剃て行く俤の時は引まされ　溪
かゝりて芸ふ茶湯乃順　通
談讀の芽たやさぬ擦ぬり　舎
一寸肴と入まし　廿一房　溪
押りなかい二はおくるゝ墓参り　通
なや　桐の葉もつけさぬもる　舎
こちくもゝの戸あす月あかり　溪
陸て来さとは見えぬ足もと　通
親乃ある子ちは手織を通し　舎
衛まさすまく家かりて出る　溪
四月へえかりさるあるそ有ちかり　通
猿まで葉終え中すむ　蛙汲　舎

春先の時候の風もかくらつき　渓
まるる一郡を置ケりすゝふ　通
挨拶をすゝむる嫁もはつかしげ　舎
借さ丁稚も何も茶々もまぬ　渓
握りの枚の数々稲る小屋呂敷　通
志年始年の着まけてゐる　舎
いつもより早く豆腐を雑炊　渓
今年茶かぶね富士の国行　通
月の出はやうき豆腐家の帯子　舎
みのほりいありて元按をさす　渓
把舟もむさと通まぬ番所　通
出る年あらぬ風のふきさそし　舎
待て居た手形一まいまです高　渓
菜みかね猿の見まはる餅つき　通
本部ハ又おちおちすつきり痛ぬけ　舎
ちらちら花もみゆる馬場先　渓
鳥の巣をさかし宮司乃小侍　通
ゑらひ扇子のありあまる夫　舎

春の部　歳旦

立春

一章するや朝日の福寿草　蓍虬

門まつけさからあるや小傘　うつき

指をりつく屏風に一日句作り　素芯
古箸のふるさや梅も手折られ　梅價
門違ひしる様すゝ宿中に礼者哉　芹舎
拵らしや菓子つる宵の小桃灯　朝陽
ついゐて梅は出来ぬ程も二はりに　鳳朗
はるかしもた露ゝゝおりへ梅落朝　南溪
鳥さかりや衣桁にかゝる縫ちらし　而后
松かけや月さえて松が影ける　千崖
月さやさや梅もまつまつなる乃うく　丈翠
猿曳のかゝまゝて裁る小袖の部　梅通
毋もかくゝさて買足りて来る蕪の花　杜撃
狸いかで握り出すや佛の座　禾木

掃くゝも詠人ゝなかなる世帯哉　凡也
松曳た手ぬかに出して見たり　両什
きさやるで手かぬ引縁や松の内　爲津

梅

あけゆるやまく月のかゝる梅の花　月底
咲くしの古郷えこえすけさの梅　布蘭
梅ろきてまゝりゝよ出すや縄すれ　梅通
神のゆるゆるしてきらきぬ世も梅の花　素芯
後生をれ月見の夜や梅の花　茂椎
梅さもうらさく有り字見の古南　芹舎
折頃乃なゝてあるく藪のうめ　万萩

柳

往らけに見てより青き柳哉　一棲

影陽らハ枝も示ぬ雨の音ら　鳳朗

若柳てすれ生て柳く柳かな　蒼虬

鞠場から[illegible]紺屋の柳哉　瓶山

松緒り翻すも風ある柳の郷　芹舎

あさ雨も地儲に流す菫の乃　芹舎

上林をとしく移らり書乃雪　馬良

至奥やそよいで柳寸細の本し　梅通

螢

うらひすや近くて人都へ折りしらく　日人

芙らはらハあるけき川辺ゆる　流芝

蛍とゝ見たさぬぬ宿に音ら水　梅通

宮臭飛ぬやゆらもされぬ森の中　梅守

雲雀

雨和り若木国すたつ人やちら霞　南溪

雲雀すらとしりハ雲から彼乃青　令

雛乃梱も打ちむてある富体　太令

畑打の扈つ音あさ寸日も昼ら哉　蒼虬

すらかりや蝶も向ふて あり　菜取

鵠のうちも荊てとり藤乃暮　立分

防の尾をかうえてとゞや端ら哉　壮巣

底衆乃帘まうけたり堤哉　著乱

鞘めしまり間や門を汁る雉子　南溪

隣家て来る内の中やあらし雉　六英

あふれさに菫すゑけり小板橋　蟻兄

名和け取手りとさす擣衣ぞ　青可

肉池へくろりと出たり春の月　南溪

傘提て出てあつさや春の月　自樂

田舎して営よき山宿や春乃水　卓池

若き方と来てけるや春の雨　荳隆

まつゆや泡の流るゝ藪乃中　士焉

春の雨や蒔つすまひの芒原　閑左

晴て春の山へおもしく出茶　月峯

取まきて水田わりつゝ出茶茶
茶　石鼓

春の鳩す方へ急ぎれとけり

うちみくる春のもののたよれなくれ

一春乃葉見てうつむく宿けり　芹舎

ふるゝみも清きより茶の水　西月

花の雨や取織消ても此さくら　波文

何取来ぬるけふも宗ふす夜乃春　茶田

ふらりとつ踏なかし又り花よし　萬丈

みより出て取子ともあふ花見の春　芹舎

氣乃御て賑ふ思ね　翌日の花見忘れ　祖郷

あかた佃花たまけまてあろりなり　砺山

松の間けさくら出しや初さくら　斗丈

葉きり落る行られのきこ山さみかな　蓍乩

つるきへて観すきての稲寄車　梅通

むらりきへ梅かりまり膳かな　益隆

梅さくや金ふる雨も浜まある　鳳朗

原中与へ今参風斗り祐寿　若稚

手細工の明て窓あり梅の花　栗哉

連翹や掃てかくれの浦りぬ　菁舎

連翹井標の紙むかくり　梅通

あかり行出えと隙見して田楽な家　崇巣

東宮家かな館出若人ゝる田楽かな　福采

掃る方芽花飛ちる日もありけり　有月

出代や左へ見え菜をゆるむきの川岸　卓池

神風とおもふ風ある汐干かな　素芯

岸のかちり浜辺ちらく潮干哉　梅通

甘いまえ京の料理や夏構　水竹

番頭なんての見かりありけりの

人のひるかりさらけや若菜

あやも大堰川辺の若菜さえ付

妹まさん笊の下にわかきなり　蓍乩

ころりあふれ侍

あふみ笑ふ雲よりかけし蜘の巣　同行 梅通

夏の部

首夏　発句

袷にも底てみくはずよ記し　久蔵

歩行て出ると先たち達もあり初袷　月坡

宮守の中より下さき着て来る袷の手　南渓

出るる先生袷は脱て明のかり　史千

和袷の袖や袂の色かわし　大郎

風呂場まで行ても来すも初鰹　野揚

涼しさや氷あるまま茶の葉なりけ　芳英

かしこ御も出ある大庭乃若葉哉　本道

御室も先ずのかゝりし葉の茶　麻夫

若葉ややりぬ色のぬけしの出ゆる　南渓

帰るにも露見てみるかわりの袖　沙跨

ふる雨たゆて雀も出来たり若楓　芳豊

若紙てのり物なりける若葉哉　江月

牡丹

錦のあく間をのりく牡丹かな　凤也

牡丹持て生ひつめてあるる遠中　抱儀

澤より掛葉をよせてけたかりふ　梅通

忍櫃より手へ見ちらぬ待るゝ哉　芳舎

杜若

むらく出て代たへ出紫は杜若　梅通

かそらつはく昔みて常来たゝみ哉　箋香

郭公

三日見ぬ木の宿遠かり子規　林芳

待ゝく来ぬ啼て居るや尾かり寸　艸方

打々鶴き啼けしもまたり待ちら夜　梅通

聞ち度ぬなきしの中や蜀魄　黙池

端午

井の茶ち栽波あけたかへ菖蒲哉　溪斎

湯外年て浮ゝ水先あふき菖蒲哉　團釈

私ゝ菖蒲ふ分二合よ紀あやめ哉　芳舎

出うさゝせて呼寄日七ある茹子ゝ条　杜蓼

非様より掃るあらや鵲斗　芳舎

汚中に痩る生ありとふ蛍　令

田うゑ

樹外乗出て帰手紀遠ふ田植哉　百池

茶の水も田ゝ急子同し乗れ哉　貨僕

植ゝ田乃ねむ郷し中待咨ら来　茶静

てらゝゝゝてらや田植の色し間ら　凤也

若手人居出て出くり苗一把　摘通

まえとふる好きりに見ゆる独走哉　莫乱

揚く先へ潮のさすかや放たれ房　鳳朗

うつらうつら宵へもちこす夜長哉　湖山

与謝の海も仏法の只大寺の鐘ほそし　文艸

二郎三郎たゝむ蚊帳の雅かな　角洲

大雨ながらの涼しき精舟哉　芹舎

五月雨

かわきたる杉の葉もしめるや五月雨　松隣

こりずまに濡しくる雨の五月かな　書恕

門先も窓も晴口や草乃蛇　鳳也

月雇笛の遊ひ出す菖蒲の水鏡哉　蕙隆

是のこれ死去こそ山の晴ふるゝ　四明

踏込んでつゝみ苔しぶくらん　枕鳥

朝の露日のつよさす蓮の花　我竟

水青く波ゆるく見えて戸の蓮かな　南溪

夕立の去て池の匂ひ風の茶屋　万籟

ゆふの藪しかり雨も見えすして茂りし　沙鷗

魚の巣やしばすたる乃ちか苅ひけり　蕓軌

峰の松ゆけき葉のいつも湖水

江に舟よびても茂りけり

枝も笠もす稲で立てや青あらし　南溪

柳子の声で稲けや去一声　梅通

門すゞみ咲りもひく物　芹舎

けふもまた見るは夕日の中や草　大梅
あやめの中より乳臭く匂ふ草　梅通
蓮咲や島の才麿子も朝のうち　一嘯
伐たまり物へらまず蓮花　梅通
名ものむるいしまに蓮見哉　芰孔

秋の部　発句

立秋

魚の血まり散りきりうけてたまの秋　千崖
あかきも帯あめて出るさ郭の嫁　芹舎
毛やかで算つかるやけさ秋あき　南溪

日盛のいる宮井や桐一葉かな　今
去のりく源氏まくらの一葉かな　子行
昔華乃朝世の桜の知らずすれ　省吾

七夕

星合や両国の今宵見てまする　喜諾
云はふは涼のあるや星祭　芝石
街道の隅うりなや天の川　南溪
様子なるの買ふ多くし天乃川　芰孔

盂蘭盆

迎火や祇園たてる人通り　喜然
ひとつまみ手の香ゆかし焼家　梅通
魂祭気の為人もゆる切籠哉　南溪

丈鋼かすかにしてあるゝ瀬々の音 令 蒼虬

はし[illegible]や[illegible]へゆるも[illegible]むよ

草花

垣乃断に撲たをりむ女郎花 一具

[illegible]見り[illegible]桔梗哉 三蔦

隙口乃こぼれてをり花すゝき 南径

蟷螂の[illegible]より蓮乃ゆかれ 沙鷗

墻垣や[illegible]町 撫磯

[illegible]のとりあへず水のうへ 黄山

[illegible]花出る[illegible] 丁知

穂[illegible]や[illegible]窓のうち 芹舎

月

二日月や[illegible]の[illegible] 蒼虬

三日月や宮刻[illegible] 梅通

[illegible] 素芯

[illegible] 蒼虬

[illegible] 芹舎

[illegible] 南溪

[illegible] 小圃

[illegible] 貨僕

梅さけり雪消すゝむ月見かな　梅通

わけぬけてよるの手際なり月の雲　一霄

桜すてゝ梅けり月すむ夜半哉　西甫

まやしよもすがら人の通ふや門の月　朝陽

ふ手形もひつきて摺の袖手際哉　素芯

聲ゆすりでけ月も立つや小田の庭　風也

秋さりまでや古井の水をまし鴫　梅通

日の暮れより名ある秋の絵かな　桐西

落かけ入て出て見る世中の秋の雲　梅通

菊

生ぬくき湯桶乃菊や菊の香も　蒼虬

わきの衣手に香あるて菊白し　太差

菊あるのまゝ手ならで桔道の門　眉岳

削ぎとして菊の香ほとりや油ぐり　祇白

花に名利の木札も淋しさよ
園より手入乃とゞかぬ手まりなし
流すまりわの人の道りちまよひ
こゝろむらさく秋はれて

九月かおかぬ菊の香も咲かず　梅通

紅葉

吹く秋て下りよわきさき紅葉哉　万般

釣りとし聞く奥ある紅葉哉　護物

積もりの落ち葉みゆるもみぢ哉　芹舎

枯つよきハ茶子はなり雪しくれ　蕙市

竹林や濁されかゝる萩乃まゝ　芹舎

冬の部 發句

初冬

かさゝくも道つゝく鳴くや小川哉　梅通

よき家のたてかけてある枯みぎは　梅價

赤門乃すゝきへ冬野哉　惟草

深や梅のうへ東風にたより　凤也

本枯れ静かな家も尓のすさ　芹舎

撫待の小窓にすゝかる薄紅　令

みどりて口鳴きけり岸儀　时竜

志くれ

御え首の古寺なかりけるし紀　芳英

書来へハ松ふらなす志くれふ雨　素芯

志ぐるゝや枯すゝき見て見る森の雪　芹舎

萩の陰まかりあふ時雨可な　南涯

松乃陰人も通りて小雨しく　令

藍紙も志ぐれての古き白なり　李長

翁忌

きよふけ水ハくみあり時雨柏植　荃乢

行かふ志ぐるゝ庵乃枝かれ　蕪山

なきかれて久すや枯尾花　得蕪

ホ口たけ枯て尾花の山深し　朝陽

霰

汲まの水ほそくなりし霰かな　令
懸葱に別るゝ霰ありけり　梅通
はらはら筆につくほと霰の焚壊り　岱年
あられ降て夜の出るや枯　寸外
氷似せつくり出す有り葱ふくけ　千軺
消さうん一月ある如し冬の月　青陵
出かけて暁て戻る網代守　桃谷
桜のあはる青松しろや冬籠　南溟
冬もなり小菜引て出る垣の之　梅通

ふらふら霰所通りて冬こもり　万銑

冬籠

降つもる都のめつらしさてあられ
見をと捨つるゝ外にも黄なる葉の
後ちあさり筆の程は
梅香を大事にかけや火もたらす　芹舎
もつれるや背と後出る松の幹　虚白
降るや綿引捕すける鋼かけ　万和
松の雪様糸る色もしふりけり　素迭
都にけれ家りありてよ乃都　梅通
かつれて入れるや雪の家　南渓
枕ちらかやねむる都雪哉　俵瓜

掃たてし庭やつゝき小そゝる　蕉夢

笠脱てあるく荒磯の千鳥哉　蒼虬

何やらやふる雲水を啼千鳥　金菜

雛は法に飛ぶ鶯の羽あれ　梅通

ありしにえて衣かゝるや鶯の床　斗丈

蝶掃やし梅よりちるもらひ鏥　南溪

雛の出て声もすゝえせしてなひ　芹舎

生笑我引ずり払や年の暮　令

田の中に雑子つくなりて事払はれ　蔦虬

舟ありたつうちをゆするや年の暮　梅通

麦秋やむしろ路也浜の上　芹舎

掃除なきちる八重の出あき　蒼虬

あさけの横すて梅を活けさせて　南溪

とつかり庭へおりたり始　梅通

布子着て梁から庭へ背飾月　虬

いけてもおそくワるる飛ひ　舎

角力場の設すそろし菜の青さ　通

納戸のよすふ餡を借る　溪

二三俵米とる暇あり花て　舎

爐おろし手川へとひ也　虬

風のさはかしさ　萩近所
ふりこめられてもまだはれぬのどけしぬ
思はぬだけ手湯皮出して閑な合を
春のりあらふより梅のあし椹く
樓町は新樣なりの人通り
あれ行五番は世ほろめく　丹
乙手まき落て花より赤き良晴　絅
出かけます人うりうすかし　風呂
女子手に居なの開も少なきなり
業りらふて肩入る　馬士
無造作に葉なり二丈のつゝて門をまる
何やかやも　このしる杏して　志ふかる

渓通乱舎通渓舎乱渓通乱舎

宋舟へこつそり舞の前を積て
たゞする羽織乃たけをはやく
待てる宵のうちから化粧はもさらす
すえや帰参の会もあらさる
待て来て魚を譲てこゝらあたり
尾の下を張らすそれすれ
仕合と通路の月もてりつゞき
稗抜ふ作はにきしかりすむ
こちらと揮華度乃ときり本こしらへて
借家の裏の孫も見てゐる
嘘をうまさにすゝめて来る　暮晋
肩を越たる飛火よけて出るゝ

通渓舎乱渓通乱舎通渓舎乱

苗さけえいふ救取も橋うけて　渓
午刻ちか出て来あまる此日　通
白粲の眉をゑかめ感情を流のうかもハ俳席の
翌も更まる事なほいふり岩残新にふき紀をとて
罷り撰り抄未字くへ百ろもの中に俳あかりえりと
清ひよ此冊子新稿とハなし

天保四年巳の初冬　梅通識

栗柿集序

ある人柿の核をふきるに藤家のなをいふそれハ
いふも縁き先実まに阪と剣も百ちいはまて来障
あきありちとめよかふ栽え十とせ斯あまりも苑さま好も
けるかりかし同しくい栗山を植ゑへせけつうみ　ことせ
たそえ必実をもすふまり豊ありと粒の小様の一表の
何を数種つき新しとよめる新もあるに遅ふものはよくあ
かふ虫と柿をとう来る人いふに栄え身後に影すまり
玉へ先法もあり好契し一葉も古まに甘え抄きまる此に
あふ次ろくに針あ甘き錆次り原年えり好きたる要
又浪速といつくもありて合すまりけり柿人来に
あるそとこちくし蔵も先其中を以てに入ても心あしかふに

あるは承りし事を書きて惑ひたるをいふ年月もあらぬ後ならぬ
別れし七とせをよむ人ありし頃老いて偲ぶも思ひ出子は
俳諧の道を守りて此事のようにかの俳書の即興をさして
席にこそ倩て夏を見かつ秋冬のむさ世の道清閑を語り
て人生の後をたのむ甚難きかくて傍輩を楽む所は
此郷にひたすら立てもあるは古事を古しいふの季を序とし
栗柿の園を桜句のうへに本来の体をもてあそびて素し
と秋の此の時一家をなりて栗柿と号せし撰者の庵
実にして後園の中に二樹の秋は実をむすぶ名とせし
も能き事ならむよりと出てあるは古くて志あらし序とせ

隨風　廣年

柿家の家しるは丈高紀栗の本と柿の本とあり
なり実のふ清もありし年は鹿肉のそのうちて
実を食ふのをかへ懐の家もよりて柿を食ひ殺父
ていひ殺ひ来て栗柿食ふ猿を落るみ枝指さらん
是をなりてある人のそれえて栗柿庵といひそしめ
てなし其栗柿の間に三畝よおもぬなくけありそれは
小圃くらひくる人もありしもはるは以上のたちを主
ありける秋以下しも小圃栗柿秋二百季忘のうち今うり
あきに守るかく侍る名は家の律ありさまの如け
なる家よよりて此こそ大なけ秋もしてあるのさ海ある家
一句あるたり作りて三年に芭蕉翁の木像をを安置し
これをこ小圃に芋席と定栗柿菴ともせさあるなりされと

まつたの也椎の本をあく明くるも後ぬ仏法手経の中に
菊の條如置たる中けしかよね元そう秋よしいまり
深き人の以ふめきと符基菩薩乃一生杖ヲ定極まも
開ね玉へりと守つる栗の本もありたく於く深也椋の
本をあきれ菊の御たゆ於いさる永れよれと飛立ひとる
多芭も取くの様も変風吹きて宿防て雲稀の実乃
之にて古来つるいらしたのしう筆海　小圃

たくか生て海買ふ二百十日之れ
戸乃明たくてヲすり招る鍋頭　禾木
むらるネぬくる薫を掃しるらん　圃
あくり系たあさ升常の附と　木

搖あつらたくむ募りの月さして　圃
賤乃ふうろく汗ときん築のむ　木
村中て蕎しかる寺乃馬　圃
多屑いきてす去ころ錢宮　木
常よりハそのくかくらぬ糸こもり　圃
痛ろ生鬼城糸つり古不かゑ　木
霄於口はつり廓乃明り數　圃
ひくん書もて傘のさきね吹降　木
汗しく分気思ひうけまん時ヲ於く　圃
北揺のそきく　尿縄又出寸　木
糸つらしや門発ヲする笑の搖ひ　圃
在都を頂上　月を頂上　木

まじ／＼すゝむ壬生念佛のひゞきかな　圃
春雨うちつゞく薄く編笠　木
職人の居らぬは足袋も饒應　令
さしつさゝれつ出る室式の制　圃
風呂の猪牙寒まり鼓出しく　木
参り青おもて飛出来なり　圃
夏もすぎ冬の恋しく思ひける　木
仮のすまひの塗畑等盆　圃
山谷から手任のちらよ帰精　木
尻もからげ傍乃本足　圃
胎好て貫目のひがみ茶のみ　木
洗ひて桶越ふりかけておく　圃

あら／＼と立まよふ浦の月　木
五六桐時のいちぢ時かたり　圃
末枯てころも次まで落蔵蘭畑　木
車たのみさゝすんだ海わり　圃
熱鎖え生謁医者に不調法　木
たのみしすゞれ痩ける春　圃
北麓たけ形一本あま花乃白　木
世あらで帰しさあまりける　圃
夕暮を見た花の名ある野さり　小圃
山桃あかる支わけ雪の月　桐雨

のけて置洗濯もの〻継のして 圍

二代ばしを付たる足青 両

玉子の赤かれた色の白き出し 圍

年時中で盛りに辛抱乃ある 両

味噌ましの雪付して入かける 圍

何もなきまする人手ある居 両

以くなきを積まで成れしたて 圍

海老まりのたる黒崎乃墨 両

有明なりて月さす出後架 圍

大工乃菜まり鰹買まり 両

何まくおしくしくなぬ秋新酒 圍

煙火つける舟乃神棚 両

あたらしい土瓶の蓋給拾て払 圍

味自らるる家主の用 両

生り赤のとひつなくてなる花盛り 圍

千部よ明のいくむ声のね 両

雌るも待ちるて香ゝ新以てかしき 圍

戎まつけ汲乃今の有ふさす 令

床自ら新一間うけよる平張り 圍

海の股めぬそ生涯の扱 両

面白き百色錢とぬ大三十日 圍

跳字多史る果新ら書 両

縁つらぬ前うち者まて里木菓 圍

痛癢持乃杉へを飛切なき 両

圍

明月乃百音守て傍らく家利　雨
居七八羽居枇杷戦す声り　圃
十分の俤といさきぬ稲乃把　雨
萩薄へ出る笠結ふる　圃
主人より先へ主の家河の杖　西
旅人ありて縫さし我鵜　圃
元日は旅しられとも旦暇し　雨
蜘る窓に我出行乃郷年　圃
菊我来り挿ともされぬ秋季月　西
聞ん旅人水も守る様我染　圃

雨くれ也くらく味て晴ゑりく所　丁知
雪加ら我家をく人す堤陣　桐西
人うけくゑ籬く雁くく嫁籠哉　千軺
都出乃花の案て来り何乃秋　一蕙
七夕也恋来て高ん出歩我面　峯笠
森る葉さくてりる家しも聲の花　岱年
二日月わかるる川や今の郷芒　よし香
あらいの音やた鱗は行海の赤　梅宮
月代や花人声の降まさく　芝乱
戸代のすかけ以けや今ふの月　百慈
小せ家へ月の夜生き居雪家乱　古春
渡り我居らて漕かくす家哉　呼牛

葬 秋のさびしさけしきなかりし　雙鳥

引葉のまゝ有あとゝ見む槿かな　可大

底ゆ植のみとりして野分哉　荷少

今はと暮ぬやとまり秋送て逢よ　貨僕

小菊さく本をも吹きる秋の風　敬斉

稲刈のあらき本社前の郷　雪蕉

山田秋朝霧雨や通り茄　西堂

釈氏乃弟ねくえる秋子ゆきんにもり　春眠

わさしての緒の錆さく橋夜のかな　素伯

一頃の柏秋窓つゝて降る哉　禾葉

菊買て抱へえ九月十日かな　鹿太

摘菊や家しあらしの隣東菊　茅丸

萩箕や小雨に濡して秋乃声　可布

行く秋をうしろに飛や鷸濱　曉河

暮る仰し声竹志々のけしきかな　斗従

夜あかつきや十夜鳴り秋乃風　之臧

川舟乃声あり残る枯尾花　鼎左

枯てから見楽みのつきし尾花かな　四明

水仙も皆けてある夜舟の郷　一夢

蕎麦のやまひの花やすいきん花　女 多代

秋彼岸の赤飯たくやかゝり義　麻交

捷に乳をせかれてもなし冬ごもり　阜洲

立つ冬りと寺の姐や冬かよへ　應ゝ

門川や水さえ〳〵桶の底　黙巣

墨遠き一日風や鶯啼す　小柯

晴の暗梢見あけるゝ小鴨ゝ鳴　徐全

ちつ霧やちかつきさる笠の上　大梅

ちり来つゝ花のゝ帰るや君のゝ門　丹月

買ものゝ傍銭涼しや年の暮　三蔦

宵ちかゝ夜ゝゝ都て春の春　五禄

見るゝれ行燈消やら鶯黄昏　赤守

行あひて立る縁をすゝし華月　流芝

一日ゝゝ手をもすむ年始家　可門

鳩いふ月見乃縁ゝさり晴の夕　楓下

待らうくたるしかし待連の内　江月

夜つきの下露のきえてかゝりける　素及

花ゝ手ゝり雨せつま筆り圃ゝ香る　露谷

旅中ゝ行春ゝ梢る花ゝ菜ゝ揶　碎嶺

けふ家傍花花葉紗砂や椽の先　鳳也

書山秋なゝりつゝやらん秋大　叢大

清きなり始ましまや書役　茂推

香も雑やおわれ配りの始季出行　沙路

山水や花とたえり春乃ある　亀得

梅花縁紅り年り秋梢見外　八朶

まかとらぬ梅や鶯ゝ先の暮　蘭竹

鶯そまりつてふゝや鵜醤油花　恭里

宇呉飛ぶは所(?)に迄見ゆる蘭(?)付(?)し　夢蝶

青柳しや舟から上て米俵　ちる杜

上り船目さすしりくる[illegible]陸[illegible]　抱儀

相宿乃客に又逢ふ柳哉　斜笠

ちりかゝる城の端の青柳かけ[illegible]　月海

法華へ一日たらぬ世那しかな　孤米

垣ちけるやや井戸から[illegible]柳かな　鳥津

婦ところ乃席出すや柳かな　砺山

桜見てはつそらあまり[illegible]　里竹

ちる[illegible]いろもつらく桜乃[illegible]　青可

滞りゐる[illegible]蔵あかる桜かな　月庭

舟もかゝる経冊をかゝるかな　涼谷

岸の[illegible]桜や梅の[illegible]　四義

柳[illegible]二日[illegible]　護物

けしめ[illegible]田乃[illegible]　棲𫝶

[illegible]京やらの[illegible]桜ちる　塞馬

啼井[illegible]先達[illegible]雲雀哉　渓斎

[illegible]足の[illegible]や浮雉　史子

神[illegible]雉　南涛

寉[illegible]鼻[illegible]先[illegible]啼雉　阜郎

一本[illegible]けかし　桟車

[illegible]桜かな　禓燕

同[illegible]川　古翠

[illegible]　秀外

獅子舞に笠とりあけるあさぢ哉　梅裡

夕皿や木賊作りのまつ汁　蘿齢

藤ちりてちらぬ家路の草　卦竜

日和まかせ雨るゝや時雨の日　蓬両

橋ひらけ朝日まちて飛燕　廿ちらさ

独り行て橋ひとつ渡り真筆　虚白

家めぐるちらく氷や寒の月　壮寥

人の来る時を起こし置けるの月　惟草

山中や元日中の小僧や炉のほとり　星谷

菜の花や立春の日あらしの町　祇白

長き日に人の見るや山の腰　一背

雛の膳とゞまりて立ちぬ夜かな　東一

傘かりる出る庭見菫の日　芦見

花時は山でくらすや寺の犬　破文

山吹や垣根の手入れ雨の跡　三枝

誰火に夜をかさね頬すまの中へ　不及

隣から聞こえてきたり　更衣　福米

奉納の扇かけ行く青葉哉　自楽

子規深山で高き声出ぬ　者吾

書初め梅の花やはらかに　平出

宵さやか山出る月の稲妻　有月

砂ぼこり人を誘ひてかへりけり　墨巣

静かさに一月花の紫の雲　銭兄

悼みんなりしの名残りのいろ紫にも　雨后

天井より垂れの[?]く蕎麦哉　蔦孫

折ふしの海苔屑えりや茶の子にけ　松什

翩翻とけさへそり祢て蝶　春渓

茶柄子たしかにタ日宇治かな　松山

川柳の[?]子の遠ざかる蔵や可那　暉連

一すちの道に杜乃ちまちにも　子行

秋の夕日出て買ふ松魚かな　之桂

傘かたむけ昔のかなしさ　東平

杜若みなみにもや藤の郷　振々

頃根の[?]さし出すや百合の花　大素

後中きりしたりやや茄子畑　可一

須磨やすかたのかげ茄子の花　東岐

昔ありし自然のかたみ筆の花　孫山

人足乃見るき中にも昔のまゝ　白兎

酔ぬりし淋しき蔵に此の雷　文含

立酌る雲の掃除ほとりや[?]乃花　石鼓

たちまち[?]の夜の月　文洲

林立ち買ふて[?]　亭中

酒すゝめ阿乃のかけや夜の菓　勾芝

踊[?]ててわかる毛むし　春帯

近寄るにも[?]蝶の噂　白桂

ましみの淋に逢はし蝶乃夢　松隣

心[?]さけて堅川[?]や五月闇　宣竹

あふ出来て袖口ぬらす清水かな　比古
山陰の日影をしのぐ清水哉　一貝
岩弱して立のくるゝつ蛍　林曹
すゞしさに呉服料理段階子　春路
泊り舟の簾にかゝれしみ蛍　斗圓
横枝を腰かけたふや涼臺　小蓑
雨の日やあふりて蓮の花の華　菊所
笋や葉まだ出る人雨降りぬ　一様
川狩やおもひ出し雨降る　大巣
川狩や鳧も寄らぬ工乃十二丁　荷了
沖鱸打鴎ひろし男かな　英山

酒盛の宮に出かける絵を掛て　小園
ふるみて出る寺の芳と染　桐雨
海なれば鳥見の舟ぶしてぬ　梅室
吹く降りにのり綾の来る　園
早苗なし梅にあつさす楼の月　雨
妨と明楼の猿る　夕ぐの総　室
麿鈔をふのありて歴の妻　園
血のゆきありの　踝然り川　雨
針立乃手引きあつて志のふ船の木　室
清からや乗合船の宮寺　川ぞさ　園
迷ふ道の中にてあ合哭さ　雨

本身も本換ともあさ一つれ
こゝろ月俳句あそびあそびあらまし
物いふちゑもくさく陰呂の又入りて
裡ならいやあはのつゝよ出来ぬりて
様かきらんは情やいつする勝豆
先の事いはい耕作常我も来年り
すゝめ我くらい陰く縁も備芸
大名も儀あきらせやもとより
応根乃銀を出ちく五編
奥かく川意見つゝりつ衣ゝ読
けさらむつまさ録す押しこれく
ちゝ計本出て多作?妻乃秋

宮 圖 兩 宮 圖 兩 宮 圖 兩 宮 兩 圖

須子能甲へらけるほくあもち
爺識ら能差らん此あく稲よき
所つふさせて噂ともみ年来
曲線我からほ子を鉢つきらて
本田をあるゝ萩乃手?む
啼かやり客きまつくま月赤し
涌くあめの人ゝ一ふ手
射りさく様り集かまて酒身き
網合我わん糸糸乃引出し
冬めりのはしら應りはしきて
たゝ以早詰をまんくさ跡其
美きあり髪刺降そあり気

宮 圖 圖 宮 兩 圖 宮 兩 圖 宮 圖 圖

かゝる身に庵乃すゝき薄かな　室

幾代女神も月に神乃際　桐雨

歩行れてふらさ頃森の下草　梅室

梅児の古枝くらむ楢林着く　小園

與勇り來るる人影まさく　雨

風に舟艫も艫先も苦藻系　室

帰らすに渡る鳥も遠ざかり　園

眼に宿る生森の稲古くらさ　雨

添くもあれは川も身寿る朝　室

梅葉の蓋は入丈の杉と来り　園

薄を美く生れて西月ちらし　雨

有明り見る夜の梅切君　室

こゑもさくくすゝけす酒　園

綴る衣に運く頃汁さめて　雨

筆禾筋に衣縫く綴る　室

あきらめの今はも悪しも生きし角　園

葉を有ちも見る色大根　雨

月暮に穂に梅のかゝみあり　室

硯の声枝にさみ出す青　園

形や汗をたまく室の兎つ恋　雨

待宵の待つまゝに引く髪　室

葬式は花に細の火に消る　園

丹呂にぬ隠られ寄かゝりく
情中鐘鉢しくらぬ物なふひ
けふなぬ醉ふもとふ尋ねおふ
ちらぬ先以の年てるまゐねくし
夜縄楽備る桓り水らぬ
ふちゝしや儀られたす力ある紀
蔵待さゝる出立ち少飛しゆく
孫ちぬ晴り見えぬうちい月細し
豆腐家ふ稀ゆきゝる朝 室
一幕ぬ竜置きくゝ秋ぬなて
すりゝ機子あまゝ 倚 飯
後濃す月俤り扇ゝゝ今ゝ海

室 雨 圃 室 雨 圃 室 雨 圃

狭の花つゝ紀尺ろんくらん都 室
みらぬ兼り後ろみよりと花のに 雨
多ぬ飛入ゐろゑ東家玄 圃

梅室

蝕ろんまん黄茎ぬ節りけさの客 小圃
多ゝ八字もうらりぬあゝる垣 桐雨
みうさるぬ路人の肩ふくえて 室
出り方きらる飯むかえびめ 圃
折めくのりぬ天気しきつゝ月 雨
情のをきめる言りむし飛ふ
襟首り数息の花中る秋ぬ風 室

浮くかへす 蝶と 履きの 圃
紅粉掃て 夜さへふ 程のこそ 両
町をおふまゝて 嘘吐く きぬし 室
耳そこり 櫟の鳴おさ 夢ちらり 圃
一通行る 結句の 背 おもり 両
孫の薮 表の扶を 尻の書画 室
甘子つらさ 簀子 手取 栅 両
蜘蛛をうつろの 鳴て それへ とまる 圃
鞘う 馬借 まてゝ 負せけし 室
西ならむ むかの 芙蓉の 花 早し 両
麻蒔こんの 何やうも 図子れ 圃
角うれ 西瓜て 帰る 童 会得 室

うつ水 走る 銚 大徳 出る 圃
白髪の 筆有 入る中う 手 添 とける 両
閨の 障子 手 うつける 裸身 圃
いつめしく 見るらの かおり 匂ひ 青 室
猪酒 つきて 御解 せし 緒 両
かふ 事 まける 見つけて 天窓 うつ 圃
妙意 以て みの 方 くする 当 東 室
後々 妻とて 快く 事 出 被 うちる 之 両
う 枝 さらふ 打ちあて 床 外 圃
入 組 く 尻 取 まで 障子 ゆう 香 有 室
半 張 尾 うつり 稲 葉 の うけ 両
鶯 鍛 背 に 机 く 逢 ふ きさめて 圃

矢たてに茶の湯る煙たけ　室
かり追く咲たけぬれ降るさけ　両
背負ふり帰りけり晩鐘　圃
たゝ私さ人をとかめる門の狐　室
きぬめん綾の襟にかきつふ　両

八
帰り華しく伸さ来あつみ　朶
嘲る香文へ京の里よそる黙　小圃
紛る絹り瓔らけ寺にて何とて　禾木
亡きあ別れる気にかゝるある　丁知
華にし鈍葉にかゝる朝の月　圃

住ろうかいし姑りに庭たまり子とく　朶
此秋は夫筏も古りわりふりて　知
真りしもうまうく雪にしりそく　木
山をさ乃うしまり嶋島のとくまちまつれ　朶
袂筆の住生子　以ておる　圃
立生っつ中屋の小堀とくちかし　木
紺に立のる刻中かりて　来る　知
来まゆの首るり出てあまる丹稚　圃
病る廿蔦に　嘉のさらちふ　朶
打ちよ　寶蔵中もてかしつまて　知
わかね持ちかゝ　すゝる　甘浦　木
争に筆篋の下手こそつく勝通り　朶

達者な男女菊ら繩なる　圃

一年の篠も算盤にまつはり　木

門にすきし川尻えめ出あひ　知

常ふ手ぬる宿らる夏の手めかり　圃

目覚膳の出　郡　あしらひ　采

気に結まぬ時咲て出あつまる出家衆　知

納戸のふち手に伸る三味せん　木

此ほと掃除のすゝ払　一笑も　采

御先のめくりつくらく　冬の阿弥陀か　圃

鐘の舟の道入らさ沙汰せまりけり　木

開城志やくく　開作しても　知

手に使うをさらさらちと月のうきふみて　圃

猿にわらふくり　芸挑をまる　采

温泉の梅も秋にさつさりかけらけり　知

只にとり　強製乃　宮山　辻　繁　木

引提たらぬや大根の乞きあまり　丁　知

志やむにほひ秋　逢ふ有る　冬　禾木

無縫さりとみそれの子孫こみそ　八采

ちいさきはらふさかりなる　市
自すへり難しせる　爽　代　溢
露の吉ありり　畳　らん　たさ
時に篠　接らり　縁中　おらわまる
つめらひよ来る　嵐　うしらきを
おとら城こいまはのたらつゝく
仕色　納　豆　乃　らき記日はらり
寿戸く入り　虧さるへうち吉庵　花
ちうらにさるね　思千　らしかり
一奥の　銭　提つらき　有　乃　酒
鮭　峯　脂の　肴つゝりもまる
其しかりいりもへ　道　入そうりたさ

小圃　木　知　圃　栞　知　木　栞　圃　木　知　圃

こくりかくゝ島ぬいおへつるる　口　数
るゝあすうきハ出自ふわすりりた　遮りあり
芸好に世身　ほりり　豆　結　文あく
ゆ好　佗さ　箒　出庵も　をめきるる
傳の　ほくり　松山　る　乃　細
いた時り　喰のえしたる　病　らり
杉に姿飯い　なる　かわり　ある
菜理らくる　肉　方つまの　適り　おけ
枯枕の　はるまさ　紐　乃　るさつく
馬の　穂　二　ゝ森ぬ　にふよ　かゝ色のあり
西　戸　東るも　むけ独　吹　俳
ありわすあ　ゆ　芳色んの　縮て　花そり

栞　知　木　栞　圃　木　知　圃　栞　知　木　栞

積物にて作りて積み重ねし　粒
肉厚の内ハ九月頃ゟちらし
おそらくハ中さ　秋乾乃末ゆ
実りの年付ら来りて　角力取
園　木　知　采　園　知　本　采　園
此菊り葉大根引抜あと中紀述等実ともりの為
且又かし時雨ふり頃に種かまきの頃ハ霊かりし

これかしみ手けふにてうつくしみ紙ゆゑに手　たる見えて
目出度きを其の夜より八栄老人中気にてうちふし
十はさくのりにいとり秋よりて天保三年閏十一月十七日
亡魂人の莫やかり　いつきそききり　よ妙安にとり
先の家業ちふりの時ひさしきさりなり清き才
帰り葉の巻ハ四百大根引のまれハ五百呈らされと
さりとて八栄老人ちと生乃亡ころの作秘あ稿て　其ます
香物はなりたる業の末り　畫つく

呉市阿賀町原
下垣内